

第2回 ライフスタイルの多様化と関係人口に関する懇談会

令和2年8月4日（火）

【田中課長補佐】 それでは、定刻となりましたので、ただいまから、ライフスタイルの多様化と関係人口に関する懇談会の第2回会議を開催いたします。

私は、事務局を務めております国土政策局総合計画課の田中でございます。本日はお忙しい中、御出席いただきまして、誠にありがとうございます。事務の関係でお伝えすることがございますので、その間はしばらく私のほうで司会を務めさせていただきます。

カメラ撮りが必要な方々におかれましては、この時間をお願いいたします。

会議の冒頭につき、本日の会議の公開につきまして申し述べさせていただきます。本会議は公開いたしますが、新型コロナウイルスの感染防止の観点から、マスコミ関係者のみの傍聴とさせていただきます。議事録につきましては後日ホームページ上で公表させていただきます。この点につきまして、あらかじめ御了承くださいますようお願いいたします。

事務局におきまして人事異動がありましたので、お知らせいたします。国土政策局長の中原でございます。

【中原局長】 中原です。よろしく申し上げます。半年ぐらい前まで地方創生のまち・ひと・しごとと兼ねて、小田切先生をはじめ何人かの先生にもそこでもお世話になっておりましたけれども、ほぼ同じ課題というか、東京一極集中のための鍵として関係人口という概念の重要性を向こうでもかなり強調しておったわけですけれども、図らずもこちらでもこの関係人口について委員の皆さんから非常に有益な御意見を前回からお聞かせいただいているところございまして、これからももっと深掘りして、少しでも、コロナに伴っていろいろな大変なことはありますけれども、逆にそれによってマインドが変わって地方創生に資するところも多々指摘を受けていますので、そういうことをしっかりとした不可逆的な変化にしていきたいと思っていますので、ぜひよろしくお願ひしたいと思ひます。

【田中課長補佐】 続きまして、総合計画課長の藤田でございます。

【藤田課長】 藤田でございます。よろしくお願ひいたします。私ですけれども、昨日付で総合計画課長という担当課長に就任させていただきました。よろしくお願ひいたします。私自身、ここに来る前、内閣府の防災でまさにコロナ禍の中で防災ボランティアの方々をどう送り込むかみたいな議論をしていたセクションから来ております。なかなか交流関係人

口というような話をしていくタイミングを、これからコロナの関係もあっていろいろ難しい局面もあろうかと思えますけれども、いろいろ議論を重ねて研究させていただければと思っておりますので、よろしく願いいたします。

【田中課長補佐】 なお、石山委員と藤田課長につきましては業務の都合上途中退席することとなっておりますので、御了承お願いいたします。

それでは、カメラ撮影はここまでとさせていただきます。今後の撮影は御遠慮いただきますようお願い申し上げます。

事務局から議事に入る前の説明等につきましては以上でございます。これ以降の議事運営は座長にお願いしたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

【小田切座長】 それでは、第2回の懇談会を始めたいと思います。

オンラインの多田さん、石山さん、どうぞよろしく願いいたします。

【多田委員】 お願いします。ちょっと声が小さいです。

【小田切座長】 了解しました。大丈夫ですか。もし何か御発言のときには手を挙げていただくなり、声を出していただくとありがたいと思います。よろしく願いいたします。

【石山委員】 承知しました。

【小田切座長】 今日の懇談会は2時間30分を予定しておりますが、恐らく大分忙しい委員会になるというふうに予想しております。コンパクトな御発言をお願いできればと思います。

それから、あわせて、今回から配席をこのように私からお願いして変えさせていただきました。役所側と委員会側がそれぞれ対面するような、恐らく20世紀型委員会だというふうに思いますが、今はそうではなく、むしろ議論を積み上げていく段階に、特に関係人口についてはその段階に来ていると思います。そういう意味では、オブザーバーの皆さんも、役所の皆さんも、我々も議論を積み上げるような、そんなつもりでこういうふうな配席をお願いしましたので、よろしく願いしたいと思います。

それでは第1回懇談会の議論の取りまとめをまずしていただきまして、今日のメインテーマですが、関係人口と地域づくりとの関係、これは非常に重要な、前回議論して、ここにいろいろな要素があるということになりました。それを議論させていただくのと、そして、いよいよ実態把握、アンケート調査ですね。この実態把握についてかなり精密な設計が出てまいりましたので、このことを議論してみたいと思います。

それでは、前回の取りまとめについてですが、特に前回、関係人口の多面的機能、あるい

はオンライン関係人口という新しい要素が出てきました。その辺の整理も含めて、小田桐企画官からお願いいたします。

【小田桐企画官】 それでは、お手元の資料1で御説明をさせていただきます。開いていただきまして、まず前回の懇談会を踏まえた今後の議論の進め方ということで、2ページに、前回の議論の主な論点を整理させていただいております。3つの観点から整理をさせていただいております。

まず、1つ目が関係人口の拡大・深化に係る全体的な課題ということで、まず、交通モビリティですとか、あるいは地域に赴くための金銭的な負担をどう緩和するかといった御意見を頂いております。当懇談会の守備範囲のところもございますので、主にシェアリングの活用などの観点から議論を行ってはどうかというふうに考えております。また、前回の懇談会で関係人口の多面的機能ということで、例えば災害時において関わり先をもう一つの拠点として活用するなどといった御意見を頂いておりますので、そこは今回、議論をさせていただければというふうに考えております。

続いて2つ目の観点として、つながりのサポートを円滑に進めていくための論点ということで、特にオンラインの活用が進んでいく中で地域のデジタル技術及びオンラインコミュニケーションに係るスキルをどう高めていくかと。あと地方では、インターネット環境等ハード面の課題もあるという御意見も頂きましたが、そういった点について今後議論をさせていただければと思っております。また、このほかに地域側の関係案内人の世代交代を円滑に進めていくために、外部人材を活用していく必要ですとか、あるいは地域側の関係案内人と都市圏側をつなげていくということが重要ではないかという御意見も頂いております。

最後に3つ目の観点として、国土構造的観点からの課題ということで幾つか御意見を頂きました。こちらにつきましては、国土審議会の長期展望委員会ですとか、そういったところで現在国土政策の検討を進めておりますので、そういったところと共有して参考にしていきたいというふうに考えております。

続きまして、3ページ、4ページ目でございますけども、少し論点が多そうなところが出てまいりましたので、各回の議題を変更いたしまして、地域と関係人口のつながりの創出というところをもともと第3回で予定していたものを、第3回と第4回という形で、2回に分けて行う形にしたいと思っております。以降の議題については順次繰り下げていくという形で開催をさせていただければと考えております。

続きまして、5ページ以下、関係人口の多面的機能ということで、例えばということで災

害等の場合について、模式図をつくって、事務局で作成いたしましたので、御意見等賜ればと思います。都市部の住民が地方に関わりを持っている場合ということでつくらせていただきました。

6 ページ目が都市部において風水害・震災等の自然災害が発生した場合ということで、仮に都市部で災害があった場合に、例えば都市部の中でも地域内関係人口による支援ですとか、あるいは都市部から地域に、関わり先に一時滞在するですとか、あるいは逆に関わりのある地域から御支援をいただくというようなこともあり得るのではないかとことを表しております。

めくっていただきまして、7 ページ目、逆に地方で風水害・震災等の自然災害が発生した場合ですけれども、こちらは逆に都市部のほうから支援を行うですとか、あるいは今回の災害でもあったと思うんですけれども、災害を契機にして地域に関心を持って、何らかの支援を行うことによって新たな関係性を構築するといつて、その結果、関係人口に深化していくというような道筋もあるのではないかとこのように考えております。

さらに8 ページ目が今回の新型コロナウイルスのようなパンデミックの場合を想定した模式図でございます。こちらにつきましては、実際に現地に行って支援を行うということがなかなか難しくなりますので、前回は議論で出ましたが、オンライン関係人口ということで、オンラインの場を通してつながるといふようなことがあり得るのではないかとこのことを表現しております。こちらについても御意見を頂ければと思っております。

さらに、オンライン関係人口につきまして、10 ページ、11 ページで整理させていただいております。10 ページが模式図で11 ページ目が論点ということになります。これまであまり議論として出てこなかったオンラインの関係人口ですけれども、リアルイベントと比較して、参加者の参加へのハードルが低いですとか、あるいは地理的な制約がなくなるとか、新たな出会いの場を気軽に提供することが可能といった、関係人口の裾野の拡大に寄与するのではないかとこのことが考えられます。そういった関係人口と地域の接触機会の拡大というのは、地域への興味を増進させて、行く行くその地域への訪問を促すという効果も期待できるのではないかとこのように考えております。一方で、オンライン上でのイベントなどを成功させるためには、コンテンツの固着性の確保ですとか、関係案内人であるオンラインファシリテーターが必要不可欠ではないかとこのことで、10 ページの模式図を描かせていただいております。

11 ページ目がオンライン関係人口の可能性ということで少し論点を整理させていただ

きました。メリットにつきましては、今申し上げたとおり、地域の制約が、距離の制約がなくなる、あるいは気軽に参加できるという、そういうメリットがあるかと思っております。一方で課題といたしまして、地域のインターネットインフラの高速回線が足りているかという点ですとか、デジタル技術の活用のスキル、あるいはオンラインならではのコミュニケーションスキルの向上といったことが必要ではないかという。これは前回も御指摘をいただいているところでございます。また、オンラインで完結するという事はなかなか難しいので、オンライン交流とリアルな交流の相互補完ということが重要ではないかというふうに考えております。また、取組の持続性の観点から、コンテンツを提供している事業者の経営的な安定性の確保が必要ではないかということで、例えば有料で提供することによって品質が向上するとか、参加者の参加意欲の向上につながるのではないかと、そういう論点もあり得るのではないかと考えております。

最後に、オンラインでの交流というのは、やはり参加しようという意識ですとか、何らか意図を持って集まっている集合体であるので、前回も出ましたアウトオブフレーム、枠外の偶発性というものを確保していくことが必要ではないかというふうに考えております。こういった論点について御議論を賜ればと思います。

私からは以上です。

【小田切座長】 どうもありがとうございました。

今お聞きのように、前回の議論によって今後の予定を変更させていただくということが1点目です。

それから、これは石山委員から関係人口にはいろいろな機能があると。それを受けて、私に関係人口の多面的機能という言葉を使ったんですが、このワーディングを含めて、御検討いただければと思います。

さらにオンライン関係人口にはどのような意味合いがあるのか。これは非常に充実した議論がありましたので、事務局に整理をお願いいたしました。それがこのような形で出てきました。

ということで、前回の議論について幅広く御議論いただければと思います。いかがでしょうか。まず石山委員、関係人口の多面的機能、このような整理でよろしいかどうか、いかがでしょうか。

【石山委員】 自分が伝えさせていただいた意見を取り入れていただいております。あとはハード面についてもという御意見をさせていただいたところであります。

が、本検討会に関しては、シェアリングやソフトの部分、特に重視する検討にしていこうとところで了解いたしました。

【小田切座長】 ありがとうございます。

それでは、ほかの委員、いかがでしょうか。指出委員、お願いいたします。

【指出委員】 丁寧にまとめていただきまして、ありがとうございます。

1つ、8ページ目のオンライン関係人口というところ、浮上してきたキーワードですけれども、その下にオンライン関係人口、こういうものですよということが4つほど例にあるんですが、僕としては提案なんですけれども、オンラインを介して、例えばぬか床のつくり方とエクセルの使い方は交換できると思うんですね。なので、知識と技術の共有というのここに入ると、よりお互いのメリットが見えやすいのではないかなと思いました。しかもこれは議論すべき点だと思います。オンラインで果たして知識と技術はどこまで共有できるのかということも大事な視点だと思います。

以上です。

【小田切座長】 この議論は今までない議論ですね。オンラインを通じて交換できる。しかも異質なものの交換ができるという非常に新しい議論をいただきました。ありがとうございます。

ほかはいかがでしょうか。嵩委員、お願いいたします。

【嵩委員】 7ページ目の地方部において風水害・震災等の自然災害というところなんですけど、今回、熊本の災害があつて、私がいた小国町も大きい被害を受けてという状況だったんですけど、県外からのボランティアはNGという話があつて、これで地元の方、結構苦労されたというところがあつて、これはコロナ禍の中でという本当に特殊な状況だと思うんですけど、こういった場合、この下の8ページとすごく絡んでくるなと思うんですけど、感染症のパンデミック的なものが起こった場合に、都市部と地方、7ページと6ページの部分もかなり影響を現在受けているのではないかなというふうに思っていて、この辺りの議論は私も専門ではないので、どういうふうに理解していただければいいのかなというところを今悩んでいます。

【小田切座長】 今の御提案は6ページ、7ページと8ページとの関係、これを御説明していただくとよろしいかと思います。田中補佐、よろしいですか。

【田中課長補佐】 今回の新型コロナの感染拡大における多面的機能については、8ページ目に整理していますが、現状としては、こちらが優先されてしまっていて、6ページ、7

ページに記載しているような多面的機能が発揮できていないような状況だと思っています。感染症が拡大しているような状況で災害が起きた場合は、基本的には8ページのようにオンライン関係人口としてつながってもらう。あとは、地域の中でしっかりと相互支援を行ってもらうことが現実的だと思います。

【小田切座長】 今を前提に考えるのではなくということで6ページ、7ページを整理していただいて、現状を8ページに整理したという、こんな位置づけだと思います。嵩委員、いかがでしょうか。

【嵩委員】 はい、大丈夫です。

【小田切座長】 よろしいですか。

ほかにはいかがでしょうか。

1つだけ確認なんですけど、オンライン関係人口は裾野という意味で、つまり、関係人口の前段階という意味合いと、そして、一方ではオフライン関係人口を補完するという2つの意味合いがある。つまり、ここのところは大変重要で、単なる前段階ではないんだという、そういう整理がなされているというふうに考えてよろしいでしょうか。事務局、いかがでしょうか。

【田中課長補佐】 小田切座長のおっしゃるとおり、裾野の部分である前段階の部分と並走している部分があるというような理解でいいと思います。

【小田切座長】 ここは意外と大切な理解で、前回議論されたのが反映されていると思います。いかがでしょうか。

それでは、多田委員、今までのところで何かあればお出しいただきたいと思いますが、よろしいですか。

【多田委員】 はい、大丈夫です。

【小田切座長】 大丈夫ですか。ありがとうございます。

石山委員も大丈夫ですか。何かあれば。

【石山委員】 1点だけ、前回、オンライン関係人口を創出する様々な事例を御紹介いただいたと思うんですけども、基本的に紹介いただいた事例というのは自治体や企業が、自分たちでコストを使って、ゼロからオンラインプラットフォームを立ち上げる。企画をして、運営までするといったようなものの事例がほとんどだったというふうに認識しております。シェアリングエコノミーの観点からすると、既にあるオンラインプラットフォームを活用することでゼロから、そういったオンラインをプラットフォームにコストをかけなくても

いろいろな自治体やいろいろな公共団体、ほかの団体等がオンラインプラットフォームを使ってオンライン関係人口を創出するようなイベント等をやるのが可能になるというふうに考えております。例えば皆さん御存知の a i r b n b とかに関しても、民泊という宿泊のプラットフォームだけではなくて、オンライン上で体験コンテンツを提供するというようなことが比較的簡単に、a i r b n b に登録しただけで、こういったイベントを立ち上げて、集客する、ないしは決済システムまで導入されている。こういったプラットフォームを使うことでこういったオンライン関係人口、様々な団体がやることのコストの低減であったり、集客等もリソースをかけずに集客を行うことができる。そういった形ができるのではないかなというふうに思っております。

以上です。

【小田切座長】 ありがとうございます。

これも今まで議論してない論点だと思います。シェアリングエコノミーという新しい方式とオンライン関係人口、これは非常に親和性があるという、そういう論点をいただきました。恐らく今後の議論を進めるときに重要なポイントとなりますので、ぜひテークノートしていただければと思います。

ほかにいかがでしょうか。

それでは、先に進めさせていただいてよろしいですか。大変失礼いたしました。

それでは、以上が前回の議論の振り返りでした。振り返りの中でも新しい議論が出てきたと思います。今日のメインテーマであります関係人口と地域づくりについて、これについて事務局から御説明いただくと同時に、4名の方から御説明をいただくような、そんなことになっております。

それでは、まず小田桐さんから説明していただきまして、引き続き私が指名させていただきますので、4名の方からの御説明をお願いいたします。

【小田桐企画官】 それでは、資料を基に説明させていただきます。資料12ページ以降になります。

13ページをお開きいただきますと、居住地での地域活動への参加状況ということで、昨年度、三大都市圏を対象にした調査によりますと、約7割の方が居住地での地域活動に参加したことがない状況でございまして、地方部の傾向につきましても、今年度、詳細の調査を実施する予定ですが、同様な傾向ではないかと考えられます。地域住民に対しても地域活動への参加を促していくことが重要ではないかというふうに考えております。

関係人口と地域づくりにつきまして、14ページに参考でこれまで出させていただいた資料も掲げさせていただいております。やはり人口減少・少子高齢化が進行していく地方部において地域づくりを進めていくために、外部アクターとの連携を強調する新しい内発的発展ということで、関係人口が非常に重要ではないかということを整理しております。

15ページを御覧ください。地域における関係人口が増えることのメリットについて整理をさせていただきました。まず、地域に多様な関係人口が存在することによって、地域住民と関係人口が連携・協働した地域づくりの活動につながりまして、地域づくりの質と量が向上することが期待できるのではないかと考えております。また、地域における多様な関係人口の存在というものが、様々な地域住民ですとか関係人口を触発して、ある種刺激を与えることによって地域の内発的発展への直接的な寄与を促すことになるのではないかということで、ひとつこの「触発」という言葉をキーワードにして、関係性を表現させていただきました。また一方で、そのアウトオブフレーム、枠外における偶発性の確保が課題ということも少し書かせていただいております。

16ページに関係人口と地域づくりへの関わりのイメージということで、地域づくりの活動に関しましては、ビジョンの策定ですとか、企画ですとか、実行、様々な段階におきまして、いろいろな関わり方、また、関わり方も濃淡があるかと思っております。そういった様々な関わり方を許容して活動に参画していただくということが重要なのではないかということを整理させていただいております。

17ページに関係人口の訪問系の関わり先での過ごし方ということでデータを出させていただいておりますけれども、現在のところ、主体的に地域づくりに参画するなど、地域との結びつきが強い関係人口の割合というのは高くはないという状況でございますので、地域との結びつきが強い関係人口を増やしていく必要があるのではないかということ、ちょっと読み取ることができるのではないかなと思っております。

参考2は地域と関係人口の視点ということで、あと都市側、地方側、それぞれの考えと、それを踏まえて、出会いとつながりをサポートすることが重要ではないかということ、また、偶発性を生み出すことが重要ということもこちらで書かせていただいております。

最後に、19ページになりますけれども、こちらは地域づくりに関わる関係人口の位置づけに係る論点ということで、このパートで御議論いただければということをおおきく3項目へ整理してみました。

まず1点目が地域における理想的な関係人口の在り方ということで、例えばウィン・ウィ

ンの関係性とはどういうものかとか、あるいは地域住民の行動ですとか、意識の変容といったところが論点としてあるのかなと考えております。

2点目に、地域側として、関係人口との連携・協働をどのようにイメージすればよいかということで、例えば地域づくりの方向性の中でどう捉えるか、地域の魅力の再発見とどう関係するか、あるいは地域ビジョンの中で関係人口というのをどう位置づけていくかといったところが論点になるかというふうに考えております。

最後に、関係人口と連携・協働するに当たって地域側で整えておく必要があるものとは何かということで、例えば地域の受入れ体制ですとか、あるいはつながりのサポート、また、継続性の担保ということも1つキーワードになるかと思えますけども、こういった点の検討が必要かなというふうに考えております。

私からは以上です。

【小田切座長】 企画官、ありがとうございました。

最後に出てきたように、徐々に政策的課題にこの懇談会も近づけていきたいと思えます。ただ、性急に結論を出す前に実態をしっかりと把握したいということで、先ほど申し上げましたように4名の方にプレゼンテーションを用意していただいております。1人10分ずつお願いするので、今から40分間のお時間を頂くこととなりますが、10分ずつ指出委員、岡本委員、中島委員、嵩委員、この順番で御報告をお願いできればと思えます。

それでは、指出委員からお願いいたします。

【指出委員】 では、説明させていただきます。関係人口と連携・協働した地域づくりということで、資料を持ってきました。

じゃ、次、お願いします。

今年1年間、この1年間で僕が注目している関係人口の動きについてお話しさせていただきます。

次、お願いします。

これはスタートして9年目になりました関係人口をつくる講座、島根県のしまコトアカデミーですが、今年はコロナ禍の影響もありまして、デジタルでフルオンライン化しました。

次、お願いします。

このような形でおとといの日曜日に開催したんですが……。

次、お願いします。

今、50名以上の方々が受けてくれていまして、東京、大阪、関西、島根講座が同時に動

いています。まず1つは、この講座をサポートするのは、しまコトアカデミーを卒業してくれたOB、OGとその仲間による400名ぐらいのコミュニティだということです。今ここに載っている画面はまさに産官学の連携です。堅苦しさもなく、さわやかで明るい感じですよ。島根県がつくってきたコミュニティの力の表れです。オンラインは、オフラインの積み上げから成り立つものだと僕は認識しています。ですので、このデジタル化は成功したのではないかなと思います。

次、お願いします。

クラシックメディア、山陰中央新報さんがバックアップしてくれています。

次、お願いします。

これは田辺市のたなコトアカデミーです。

この後、お願いします。

たなコトアカデミーでは受講生が田辺市の関係人口となって、自発的にウェブサイトであつたり、キャッチコピーであつたりをつくってくれています。

次、お願いします。

この後、関係案内人の議論もしたいと思うんですが、こちらはたなべ想像未来塾の皆さんと、それから田辺市の真砂市長直轄の営業室の職員の皆さんがバックアップしてくれています。

次、お願いします。

いろんな方が参加してくれて、紀伊民報などのメディアがやはり応援してくれています。

その次ですね。年に3回程度、青山の国連のファーマーズマーケット、田辺市の方と共同で、関係人口のみんながマーケットを出してくれるんですが、ついに黒字になりました。これは大きい成果じゃないですかね。

次、行きましょう。

ここからは地域に何があつたらいいかという話で、3つの、僕がずっと注目し、拝見している例を持ってきました。まず、岐阜県の各務原市です。こちらですね。誰も使っていなかった公園が格好いい公園になって、そこに若い人たちが集まるようになって、1日に4万人集まるイベントをつくったのは地元美容師さんだったり、カフェのオーナーだったり、雑貨屋のオーナーだったりする。このかかみがはら暮らし委員会のメンバーの皆さんです。関係人口を迎え入れる関係案内人が1人また1人と現れて、今80名のコミュニティになりました。

次、お願いします。

もともと使われてなかった公共の施設を管理・運営を任されて、このように人が集まる場所に変えました。

次、お願いしますね。

ここに来ることが楽しい、つまり、関係案内所の機能を公園につくって、そこにまた1人と関係人口が増えていった結果、各務原市はおしゃれで、素敵で、格好いいという認識になりました。そうすると、何が起こるか。若いファミリーが引っ越してきます。そういうことも生まれるような素地を関係人口がつくった一つの例でしょう。

次、お願いします。

次は、那珂川町から那珂川市になった福岡県的那珂川の話ですね。これは駅が関係案内所になっている例です。博多南駅の駅ビルですね。この駅ビルを見事に再生、復活、さらにコミュニティの幅を広げた立て役者の1人が、油津の再生に関わった木藤亮太さんです。木藤亮太さんの地元が那珂川で、那珂川に戻ってきて、このようなコミュニティをつくりました。

次お願いします。

1階、2階、3階、4階の機能はそれぞれ町に戻ってきたり、博多から帰ってきた人たちにとって役立つ機能でありながら、その地元に関わる雰囲気それぞれの階で用意しています。

それをつくっているのは次ですね。この3人、若い方々ですね。彼らの手法はとても画期的です。なぜかというと、「地域づくりに関わろうよ」ということを大きな声では言いません。ただ、このビルに人がいつもいるという安心感を味わいに来る学生の中から、1人、また1人と関係人口になっていきました。町に関わる南畑地区の農業を盛り上げたい、そんなクロスの関係性をこの駅ビルからつくったという意味で、駅ビルの空洞化よりも、駅ビルを関係案内所にする事でこのようなことが生まれるという一つのいい例だと思います。

10分ペースで行っていますね。7分で終わりにします。

これ、最後ですね。まさに最近、国土交通省の官民連携まちなか再生推進事業に採択された1例ですが、私が6年前から拝察している宇都宮市の例です。

次お願いします。

中村周さんという若い建築家です。宇都宮大学の大学院を出て、東京から週末になると宇都宮に通って、白いビル、そこにあるゴールドコレクションビルの再生をしています。

次、見てください。

これがビルの中です。完成形を目指していません。関わりしるに重点を置いています。若い人たちから「ここは一体なんですか?」という言葉が出てくる、その環境を引き出しています。ここは一体なんですかということの裏返しには、自分だったら何ができるだろうという言葉が表裏一体なんですね。自分たちに何ができるんだろうと思わせるようなビル造り、これが浸透していつてまちづくりにつながっていつています。

次お願いします。

こちらの写真も実は重要で、宇都宮市の近くには茂木であったり、大田原だったり、真岡だったり、それぞれ文化、教育、それから、とても面白いことを考えている方、若い方がいらっしゃる場所なんですね。宇都宮が今度ハブになって、そこにいる皆さんがやってきて、このビルから子供たちにサイエンスやテクノロジーを教えるようになりました。ホンダの職員であったり、パイオニアの技術者だったり、そういう若い人たちが宇都宮、面白いじゃんと言って、このビルに集まるようになったんですね。これは宇都宮市さんも協働しています。地域が関係人口を介在して、地域内の盛り上がりをつくる一つの例としては、人口50万人のまちでもこのようなことが起こり得る。中山間地域だけではない関係人口のつくり方を宇都宮はつくっていると思います。

これで僕の話は終わりにしたいと思います。

一応、これ、関係案内所と関係案内人、老舗メディアとの連携、U字効果。U字効果というのは、あさっての方向でやっていることが実はストレートに行くよりも作用するみたいなことを最近伝えたいなと思って、U字効果という言葉を選びました。例えば林業の再生をするために愛犬家が集まったら、そこが大きなドッグパークになって、森に注目を集める、森を見る人たちが増えた結果、森の再生が始まったみたいな、それをU字効果と僕は呼んでいます。

ちょっと早足でしたが、これで僕のプレゼンを終わりにさせてください。ありがとうございました。

【小田切座長】 どうもありがとうございました。非常にリアリティーがあるお話と同時に、新しい議論もいただきました。後でぜひ議論させていただきたいと思います。

それでは、岡本委員、岡本室長、お願いいたします。

【岡本委員】 次のページに進んでいただけますか。

鳥取県の関係人口なんですけれども、これは去年7月に組織の改正を行いまして、これまで観光と移住系、県外の事務所というのがばらばらになっていたものを、交流人口から関係

人口までを1つにまとめた組織を昨年7月につくりました。それで、移住・定住の関係の部局の中に関係人口推進室という専門の室を置いたという形になっております。我々、関係人口推進室で何をやっているかという、これがまさに鳥取県が関係人口に何を求めているかということになると思うんですけれども、1つは都市圏の若者との関係人口形成ということで、1つ挟んで、若者定着関係というのが出てまいりますけれども、鳥取県、特に若い世代の人口流出が深刻な課題になっております。ですので、関係人口の施策も若者をどうやって地域に引きつけていくかということが大きな課題になっていたということでございます。あと真ん中に企業人材等との関係人口形成というものも出てまいります。

次のページをお願いいたします。

まず関係人口の施策も昨年度から本格的に広げてきております。それまではどちらかというとワーキングホリデーとかが中心だったんですけれども。そして、進めるに当たって、一番最初、何をしようとしたかということで、まず地域側に受け入れる体制をつくる必要があるんじゃないか、そして、都市圏とのマッチングをする必要があるんじゃないかということで、先ほど既に長年取り組まれたすばらしい事例を見せていただいたところなんですけど、その前に地域の人たちに地域を面白がってもらって、関係人口の案内人になっていただくというような形で、昨年、県内で既に関係人口案内人になっている方をコーディネーターとしまして、ワークショップとか、シンポジウムとか開きまして、若い人たちに来ていただきまして、関係人口案内人になる人の発掘とか、こうやって地域をみんなで面白がっていったら、関係人口が広がっていくんじゃないかというようなことをさせていただいたのと、あとはそれらを記事の形でまとめたり、首都圏、関西圏等で鳥取県に関心がある方たちと前で小規模なイベントをやってみんなで面白がってみよう。まさに左側の「おもしろがろう、鳥取」という言葉が出てくるんですけど、関心を持って地域を楽しんでいただくところからスタートしようということから始まりました。

めくっていただきまして、ここから先はこれまでも行ってきたところの部分ではあるんですけれども、1つはプロボノの受入れということで、課題を通じてということで、まず、前の年に各市町村に関わってもらいたい課題は何だろうかみたいな話を各町のほうに投げかけていきまして、それで、各市町村のほうからこういう話があるんだけど、どうだろうかというところを県とか、あと地元の県民活動活性化センターという県のボランティア等の受入れ等を行っている団体なんですけど、ここも入りまして、こういうことであれば外の人を受け入れてやってみたいというところを取り上げてやっていくというものでございます。特

色としましては、首都圏の人材と鳥取県の地元の人材が大体半々ぐらいの数でチームを組むという形で、地元の方にとっては、首都圏の方と一緒にすることで、別の視点が出てくると。首都圏の方も地元をより知る人たちの話題から出てきますから、地元だったらこんなだろうというところが出てくると。そういうのをオンライン、実際に来ていただくのが、去年台風があったりして、数が少なくなったものですから、そこはオンラインを使って補完しながら議論していただきました。ただ、やっぱり実際に来て、現場で見て発表会などをしていくうちにこうやって人のつながりが出てきて、実際、継続して働きたい、継続して関わりたいとか、地域が最初期待していたもの以上のものを返していただいて、結構地元の人が感動したというようなこともあったりして、これはコロナで、この後、交流が継続しているかどうかというのは確認できていないですけれども、過去に入っていたところとかでしたら、定期的に連絡を取り合っていたりという例もありますので、こういうのがきっかけになればいいなと思っているところでございます。

めくっていただけますでしょうか。

とっとり暮らしワーキングホリデーですけれども、これは鳥取県が県外対象者用と県内対象者用という2つ設けておまして、県外のほうは県内に2週間以上滞在していただきまして、働くとか、実は働くというのはボランティアの場だったり、地域の面白いことを自分で課題を見つけて探してもらおうとか、そういうのもございます。そういった活動しながら、地域住民との交流や学びを体験してもらおうものでございます。県内学生は、どちらかというと、県内の大学に来て、県内のいいところを知らない、意外と県内に来ている学生というのは近くの県内に関わっていないというのもありまして、ですので、県内向けの、短い期間なんですけれども、ワーキングホリデー制度というのもつくっております。

例としまして、2つ挙げておりますけれども、もちがせ週末住人の家というのは鳥取にあります鳥取環境大学という大学の学生さんたちがやっている民泊施設なんですけれども、ここに平成29年から平成31年まで、45人の方に入っていて、地域と一緒に盛り上げる活動をしていただいたり、地域住民との交流をしていただきました。地域のおじいちゃん、おばあちゃんたちとかとつながっていくというのと、その中に地域でもともと活動しておられる関係人口案内の方とかというのと交流をしていただくというようなこともございまして、こちらのほうに先ほど若い人の流出がという話をしましたけど、もちがせ週末住人の家での交流をきっかけにしまして、地元への就職とかにつながったりとか、就職等につながらなくてもあそこのおじいちゃん、元気だっけという形でその後のつながりとかに

つながっているというような例もございます。

めくっていただけますでしょうか。

最後、ワーケーションという形で出てきておりまして、ワーケーションのほうも観光とあわせて長期滞在をしていただくとか、休暇を取っていただくために旅先で仕事ができる環境を整えましょうというような部分につきましては、旅館等とかの整備推進等は観光サイドでやっているんですけれども、我々のほうが考えておりますのは、どちらかという都市部にいる企業人材の方であるとか、副業、兼業とかをしていただいている人材の方とどういうふうに関係をつくっていくかというほうを我々関係人口推進室では重点を置いて行っております。中身としては基盤整備なんですけれども、特に力を入れておりますのは企業さんのニーズとか、具体的にこのときに多かったのは、企業人材向けの研修とか行っている部門であるとか、副業とか、地方に貢献したいとかと言われる東京の一般社団法人の団体さんとか何かとの関わりだったんですけれども、県のほうでニーズを聞き取りまして、地元の関係団体とか行政機関との交流とかの仕掛けであったり、そういったプログラム作成とかの調整を行うコンシェルジュの機能について力を入れているところでございます。

こうした、どちらかという、普通の観光をして帰っていただくというよりは、より地域に深く関わっていただく、それもつながりになっていくというふうな仕組みをつくってきたいと考えております。

私からは以上です。

【小田切座長】 どうもありがとうございました。鳥取県では観光、関係人口、移住・定住が1つの部局で横断的に行なわれているという、その事例をお話いただきました。大変ありがとうございました。

それでは、中島委員、お願いいたします。

【中島委員】 私からは昨年度の後半に実行しました取組について御紹介したいと思います。富山県南砺市さんとカヤックLivingのほうで進めた内容でございます。地域づくりにおける関係人口の関わり方です。南砺市さんとの取組の名前は、地域の困りごと解決移住促進事業という内容になっているんですけれども、もともとのこれをやりましょうというふうになった背景というところなんですけれども、今までは南砺市さんのほうでも、どちらかというとフリーランスの方か、副業を希望する都市部の正社員の方に南砺市さんに来ていただいて何かしら関わりを持っていただくというような内容のを中心にしてきていたそうです。やっている中で、いい事例なんかも幾つかあったというふうに伺っているんですけれど

ども、地域の方々から関係人口というものが自分たちの地域にどんな効果があるのかという問いかけがあったというふうに伺っています。つまり、関係人口を増やしていこうという自治体の皆さん、地域の皆さんの活動は正しいんだけど、地域に直接的にどうかかわるのか。地域の人たちがどのように関係人口の方々に関わっていくのかというところがやや説明なのか、施策の内容なのかで届いていなかったんじゃないかという仮説が南砺市さんのほうで持たれていたと聞いています。

今回、私たちがやった取組は、南砺市さんと、南砺市さんと一緒に進めていらっしゃるまとめる専門家さんという地域の団体の方、あと南砺市さんは合併をかなり大規模にされているということで地域づくり協議会という団体、各地域の委員の方々がいっしょという団体、そして我々という、大きく言うところの3つの連携で取組をさせていただきました。今回のこの取組に関しては地域の困りごとに協力してくれる人を見つけていきたいと思いますという切り口にいたしました。このようなタイトルにすることによって地域の人たちの関与だったり、関与、関わり、関心みたいなのところを生み出せるんじゃないか、そしてその先の関わり方、継続的なつながりみたいなことにつながっていくのではないかとということが目的でございました。

次のページ、お願いいたします。

今回は、地域の困りごと、地域の課題というテーマでやっておりました。一番最初に取り組んだことは地域のまちづくり協議会の皆さんとこの地域の課題は何ですか。この地域の課題を一緒に解決してくれる人を募集していきましょうという切り口でやったんですけども、何と地域の課題はない。ないというか、出てこなかったということです。皆さん、地元でそれぞれ頑張っていっしょし、いきなり地域の課題と言っても、そんなにぱっと出てこないというのが、私たちが話をしている中で出てきた内容でございました。私たち、よく課題という言い方をし過ぎるなというふうに改めて思ったところでございます。そして、このとき、ちょっと言い方を変えようということで、もったいないものってありませんかというふうに言い方を変えてみたところ、そう言えば、あそこのケーキ屋さんはずごいおいしいケーキだし、毎年バースデーケーキをみんな買いに行くんだけど、跡継ぎがいなくて困っていると言っていて、あれはもったいないね、なくなっちゃったらというような、そこで多分私たちはこれが課題だろうと想定していたものが、もったいないという言葉になったときに、地域の方々が入ってきてくださったというのが非常に印象的でございました。

ここに書かせていただいたんですけども、都市部の人にとっても、多分地域課題を解決

してくださいと言われても、都市部でいきなり行って、地域の課題解決をしてくれと言われても、ちょっと重たいよねと。私は都市部の人間としても思うわけなんですけれども、逆にこの地域が大切にしているものを一緒に何とかしませんかという言い方をするほうが興味を持っていただけるんじゃないかということもこのプロセスの中で分かりました。

私たちはSMOUTというサービスをやっておりますので、ここから出てきた取組ですね。もったいないと思っていらっしゃるものをプロジェクトという形にしました。次のページでございます。

南砺市さんの中で、これはもったいないと思われた内容として、サツマイモの屋台を一緒に盛り上げてくれる仲間募集だとか、お祭りに一緒に参加しませんか、手伝いませんかとか、こういうふうにもったいないなというふうなものに出していただいたものは、都市部の人から見ても非常に温かみがあって、手触り感があって、イメージのつきやすい、関わりやすいような内容になったかなというふうに思っております。

この説明を、最後は格好よくお伝えしたかったところなんです、コロナの影響でこのプロジェクトを立てた直後ぐらいに移動ができなくなってしましまして、参加したいという、参加希望者が非常に多かったんですけども、具体的な移動につながっていないところの問題もあって、今止まってはいますが、都市部の方々の反応は非常に強かったというか、興味を持っていただいて、直接具体的にどんなことなんですかという話にまでつながったというような話がございました。

今回のこのテーマの中で言いますと、やはり地域における理想的な関係人口の在り方というのは、地域の方々にとっても自分ごとができるような切り口であり、自分たちがもったいないと思える、これをぜひ都市部の人たちと一緒に関わりたいなと思えることというのが、1つ立ち位置であるし、関わり方の在り方の一つなのかなというふうに考えております。

報告は以上でございます。

【小田切座長】 ありがとうございます。

中原局長がまち・ひと・しごとにいらっしゃるときに、地方創生にはプロセスが重要だという議論をしたんですが、まさに地域が直面するプロセスの話をさせていただきました。ありがとうございます。非常にリアルな話です。

それでは、最後に嵩委員からお願いいたします。

【嵩委員】 私のほうからちょっと大仰なタイトル、関わりのステップをデザインするというところで話をさせてください。

我々、移住の支援をやっているという話なんですが……。

次のページ、お願いします。

こちらの図、よく使わせていただいていますけれど、我々のところに来ている方というのは上の三角形のところ、すぐに移住したいという方なんです。ただ、その裾野が実はすごい広がっていて、ここに取りあえず線を引かせてもらっていますけれども、ここに閾値があるわけではなくて、本当にグラデーションでいろいろな方がいらっしゃいます。ただ、今、関係人口というところと言うと、何となく地方が気になるという、そのぐらいの方というのがターゲットかなというふうに思っていて、広い意味での田園回帰、地方に関心がある層というのが結果的にもしかしたら移住につながるかもしれないんだというふうに思っています。

私たちは関係人口を移住の前段階というふうに考えていたんですけど、2015年から3年ほど、新潟県がライフスタイルカフェというのをやっております、そちらのほうでは、こちらで言うと潜在層へのアプローチ、移住というキーワードを使わずに地方の暮らしを紹介するようなイベントを3年ほどやっていました。移住のハードルを下げるという意味合いもあるんですけど、地方の暮らしをまず都会の人に知ってもらうという。そういった場をつくっていきこうというところで、新潟のイベントなんですけれど、京都に移住された方を連れてきたりとか、様々なテーマに引っかかる人をまず地方の関心層を増やしていくという、そういうところをやっていました。

この中の図で言うと、ライフスタイルカフェという場はつながる場として、私は見ていたんですけど、あくまできっかけをつくるというところで、これをやっていたのは中越防災安全推進機構というところなんですけれど、その後、イナカレッジのインターンシップという、1年から短い期間だと1か月間の地域でのインターンシップ事業をやっています、そこで体験、交流、それをやることによって、そこに住んでみたいと思う動機とか、あるいは目的をつくっていく。個人的にはこの部分に関わりしろなのかなというふうに思っています。結果的に移住した人に対して、地域の関わりをより深くするというのは、もしかしたら、関わりしろをつくったコーディネート的なものではなくて、本当に地元の人なのかなと思えますが、移住から定住までのアプローチ、この辺りは関係案内人ではなくて、地元の方がどう支えるか。本当に地域の力が問われるなというふうに思っています。

次のページ、友人たちと建築学会の中で議論してきたものを2年前に本にしたんですが、その中で議論していたのは、日本全体人口が減っていきますよ。ただ、都市農村交流によっ

て集落内のご縁の量をとにかく保っていこう。縮み方のシナリオの1と2というのをつくったんですけど、このまま目玉焼きを焼いたときにぎゅっと縮んでいくのか、あるいは白身の部分は残ったまま黄身が縮小して行って、その関わりの部分を保っていれば、御縁の量というふうに言っていましたけれど、関わりしろを残すことによって偶発的に定住希望者が来るかもしれない。あるいは様々な人が関わる場がつかれるかもしれないという、これを担保していこうという、そんな議論もしていました。

今回、関わりのステップという話、自分の中で頭にあったのは、昔、30年ぐらい前に出た研修で、環境学習の分野で子供たちにまず興味を持ってもらうためにはイン・ネイチャーという、まず自然に触れ合う。その次のステップとしてアバウト・ネイチャー、自然って何なんだろうと。その後にフォー・ネイチャー、自然のための行動を取るという、そんなものを昔習ったんですけど、そういった場づくり、関わる機会が環境への関心の高まり、そして目的をつくるという、これが1つイメージになりました。

例えば今宇佐市になりましたけど、大分県の安心院ですね。こちらのほうからグリーンツーリズムというところ、本当に先進地でもありますけれど、ここではこういうカードをつくっていて、出している写真は古いものなので、当時はビジタースタンプ、今は親戚カードというものになっていますけれど、1回泊まれば遠い親戚、10回泊まれば本物の親戚という形で、このスタンプ、10個たまると、冠婚葬祭の案内が来るという、そういう関係づくりを結果的につくっていったというところなんです。私なんか、この中山さんのところに泊まると、まず何をやるかという、エアコンの掃除をやるんですよ。ミヤコさん、本当に年とって、そういうところ、手も届かないので、私が行くと、必ずエアコン掃除をやっていくという。しばらく行ってないので、ちょっとどうなっているか、不安なんですけれど。そういう関わり方を地域から提案していくというもの。

次のページでもう一つ、九州ツーリズム大学。私が9年間いた熊本の小国町の九州ツーリズム大学、私、ここの事務局をやっていたんですけど、市民大学ですね。グリーンツーリズムを学ぶ場としてやっていました。ちなみに、この写真、上の写真、小田切先生が話されている様子なんですけれど、随分雰囲気が違うので、また必要があれば大きい写真を用意します。

私、ここで学んだのは、対等な関係ができたのと、受講生が都市住民と農村の住民ということで、しまこトアカデミー、もしかしたらそういう場かもしれないですけど、対等な関係づくりができる。これまでどちらかというと、都市農村交流というのは農村側が都会の

人を招くという、そういう関係性の固定というのがあったんじゃないかなと思いますが、ツーリズム大学はここで初めて対等の関係ができた。相互交流ができたということですね。そういったものが半年間やっていたので、地元の人とよそから来た人は非常に仲よくなって、もっと地域に関わりたい、そういった場を欲しいという、そんな話もあったんですね。

次のページ、もう一つ、インターンシップの話で言うと、かつて、回帰支援センターに向かっていた福井県若狭町の職員と一緒にこれを組み立てたんですけれど、若狭町は漁師民宿が非常に多くあった地域ということで、そこの課題、後継者がいないとか、そういった様々な課題があったんですが、そこに大学生とか、いわゆる女子大生を若女将という形で2週間、派遣していました。2週間の体験研修の中で最終日になって、彼女たちが2週間の関わりで終わるのは嫌だと。自分たちでもっと地域に関わりたい、地域に恩返ししたいという、そういったことを言ってきまして、町長は観光サポーターとして委嘱しました。それをやると、彼女たちが自分たちで企画して、例えば大学に地元の中学生在が修学旅行に来るのであれば学食を使って梅干しをPRする場をつくろうとか、そういうこともやりますし、たまたまですけれども、タレントになったOGが梅酒大使として特産の梅酒をPRするとか、そんなことをやっていました。

次のステップのデザインの話ですけれど、これも小国の話で、先ほど話したツーリズム大学の卒業生とか、そういった人たちを中心に、廃線跡の活用プロジェクトというのを立ち上げました。当時、国交省の事業、支援していただいたんですけれど、これも地域の住民と都市住民で検討していきましょうと。当時、地域応援なんていう言い方をしていましたけれど、ツーリズム大学の講師とか、卒業生、あるいは大学生のインターンシップに来ていた学生とか、スタッフですね。いろいろなワークショップとかやってきました。結果的に廃線跡を歩けるようにしようというところで、これまで地域づくりという文脈というか、言葉ではなかなか参加しなかった、本当に小学生とか、あるいは80歳を超えたおばあちゃんとか、そういった方が昔あった廃線跡が歩けるようになっている。具体的なものがあったというところで、かなりの地元の方の参加もありました。

次のページ、ステップのデザインというところで、先ほどの話に戻るんですけれど、イン○○、アバウト○○、フォー○○というきっかけづくりと関心を高める場づくり。先ほど指出委員が田辺の事例を挙げましたけど、あれも多分場づくりだと思うんですね。あとはそういった関わる目的づくりというのが対象とかの話かなと思います。今回、関係人口、あるいは移住という話になるのであれば、やはり対等の立場での協働・共創の場づくり、そして、

場づくりだけではなく役割をどうつくっていくのか。ウィズというところを個人的には着目したいなど。というのは、関係人口、本当にアプローチはいろいろありますけれど、深く関われば関わるほど謎の圧力がかかって結構大変なんですけれど、こういう地域の思いがあればあるほど深く関わるけれど、いろいろな圧力があるので、なかなか難しい部分もあると思います。

最後、ちょっと中途半端なイメージをつくってしまったんですけど、ツリー、いわゆる関係がツリーなのか。特にオンライン、インターネットとかでつながってくると、セミラティスみたいなものになるんじゃないかなというところですね。他者の介在するポイント、ノードが多いというのが特徴かなと思いますけれど、こういうツリー構造での人間関係ではなくて、上から見ると、本当に複雑に絡み合っているという、このセミラティスの部分、もしかしたらリゾームみたいなものかなというふうに思いますけれど、ちょっとこの辺りが私の中でのイメージです。

以上です。

【小田切座長】 どうもありがとうございました。問題提起も含めて、今までのお考えを総括していただきました。

それでは、4名の方からのそれぞれの報告をいただきました。何やらシンポジウムをしているような気分になってきたんですが……。いろいろ積み重ねの議論ができそうです。予定より実は25分早く動いておりますので、事実関係の質問でも、特に資料1の19ページにあります政策課題といいたいでしょうか、今日頂いた実践的な、政策的な質問に対する回答を導くような、そんな質問でも構いません。お願いしたいと思います。どなたからでも……。それでは、谷口先生、お願いします。

【谷口委員】 谷口です。大変zeitakuなお話をたくさん聞かせていただいて、幸せな気分になっております。ありがとうございます。

僕、こういうことでは素人なので、本当に素人くさい質問になって申し訳ないんですけど、指出さんと岡本さんへの質問になるかなと思うんですが、指出委員さんのお話の中で一言あった、オフラインの積み上げがオンラインになっていくというのが、ああ、なるほどと思って、オフラインのものっていろいろあるなと思って考えていたところ、岡本委員さんのお話のキーワードの中で県人会というのが出てきたんですね。それで、長い時間のスパンで考えたときに、我々は今どういうところにいるのかなというふうなことを思って、例えば県人会みたいなクラシックなオフラインのものというものが、例えば指出さんがやっておられ

るようなこういうものに代替していくのか、入れ替わるのか、両方とも併存するのか。それとも県人会というのは減んでいくのか。何というか、そういう転換という目で見るときに今あるオフラインのものはどうなんだろうかということですね。それは今日の資料1の19ページの議論の中で、例えば地域側が整えておく必要があるものは何かと言われたときに、そういうなくなっていくかもしれない関係人口というものをうまくサポートしたほうがいいのか。それか、そういうものは、いや、そうじゃなくて、オンライン的なものに全部代替していく可能性が高い。もしくは最後に、これも話があっちこっち行って申し訳ないんですけど、嵩さんが御提案されたツリーとセミラティスという構造のお話とも関係するんですけども、県人会の構造というのはツリー的だと思うんですね。例えば幹事さんがいらっしゃって、会長みたいなのがいて、おまえ、ちゃんと次の来年の会をやれとかというふうな感じで、中に組織として階層性があるような、そういう集まりだと思っているんですけども、そういうオフライン的な集まりというのが、我々が今議論しているような新しいつながりとの親和性というのがどれぐらいあるのかというふうなことも含めて、大きな流れとしてどうなっていくのかなというものが、すみません、素人的に素朴な疑問だったので、その辺りで教えていただけることがあれば、お知恵を頂きたいなと思いました。すみません。ちょっと雑駁な質問で申し訳ない。

【小田切座長】 これは岡本室長、指出さん、どっちから。岡本室長からお願いいたします。

【岡本委員】 そうですね。県人会の話をいただきました。鳥取県も実を言うと、県会の高齢化というのと、若い人が入ってこないというのが問題でして、これはどこも一緒だと思うんですよ。その1つ気になっているのは、県人会というのはどっちかという、過去のつながり。いわゆる思い出縁なんですね。思い出縁で、これは年を取った人ほど古く重ねられていくので、なかなか新しい人はそこに参加しづらいというようなものがあると思うんです。

あと一つ、ちょうど嵩委員さんから言われた分で、県会はどうかという、思い出語りの部分、後向きと言ったら言い方は悪いですけども、そうじゃなくて、いわゆる関係人口的にしていくにはそこにありますイン、アバウト、フォー、ウィズという4つのプロセスがありましたけど、そのところが、どう入っていくかということだと思うんですよ。県会が減るかということはないと思います。それは併存的なものなんですけど、そういった県会という名前じゃなくて、地縁的なつながり組織、例えば同窓会というものは残ってい

くと思うんですけども、うまくいったところというのは、嵩委員さんが言われたような、触れる、学ぶ、そして何か関わっていくという、そういう仕組みができたところかなというふうに見ております。ですので、そういった仕組みをどうやってつくっていくかというのは、そういった潜在的な関係人口の集まりである思い出縁的な組織を活性化させていくキーではないかなと思いました。

【谷口委員】 ありがとうございます。

【小田切座長】 それでは、指出委員、いかがでしょうか。

【指出委員】 谷口先生、ありがとうございます。今、岡本さんがおっしゃってくださったように、県人会と例えば関係人口のコミュニティというものがある立ち位置みたいなものは少し違うんだらうなというふうに思いました。それで、例えば講座の受講生を募集するときに県人会の方に当たってみてはどうか、それから、東京の中にいるその町や県を応援する若いコミュニティに相談してみてもどうかということをよく持ちかけられるんですが、しまコトをはじめとして、各地域の新しい関係人口の講座から始まるコミュニティにそういう人たちはほとんど現れません。現れる理由があまりないんだと思うんですね。「知っているし」みたいな感じで。それもあって、違う形なんじゃないかなと思いました。嵩さんが本当にいいプレゼンを聞かせていただいたんですけども、まさにしまコトとか、セミラティスのノードが多いという形で、それぞれがTシャツをつくりたいとか、発酵食堂をやりたいとか、ポイント、ポイントごとにプロジェクトになっていたりしているという意味では何かを目指してプロジェクトを大きくしていくというよりも、分散自立型で、それぞれがポイントになって何かをやっているという感じはありました。

以上です。

【谷口委員】 どうもありがとうございます。

【小田切座長】 嵩さん、どうぞ。

【嵩委員】 県人会の話がありましたけれど、7、8年前ぐらいになりますかね。ネオ県人会というのが一時期はあったんですよ。最近、あまり聞かなくなったんですけど、いわゆるおじさんとか、おじいちゃん、おじさん、60代、70代ぐらいのツリー状になったヒエラルキーの塊のような、ああいった県人会には参加できない、したくないという、いわゆる地方出身者が、本当に当時からオンラインでというSNS、当時はまだミクシーがメインだったかなと思いますけれど、ああいったものから出身者の集りというのを結構やっていたんですね。ゆかり飲みというところで、私も長野のゆかり飲みというのに声をかけら

れて、まず、長野県にゆかりがある人、100人で飲もうよという、新宿の飲み屋、貸し切って参加したのを覚えていますけれど、それがどんどん輪が広がって行って、これ、全部口コミなんですよ。友達が友達を呼んでという形で、最終的に渋谷のでかいビル、ホールを借り切って、信州若者1000人会議という、1,000人集らなくて、たしか七、八百人だったと思いますけれど、そういう場づくりまで、当時やっていたんですね。ただ、その後、広くなり過ぎると、多分また小さいユニットに分かれていくんだろうなという。それぞれ興味分野に分かれていったんじゃないかなと思っていますけれど、それが隠れたわけじゃなくて、さっきリズムの話をしましたけれど、ハブではないんですね。接点ではあるけれど、常に中心が変わっていくというものだなと思っています、何かそのテーマのときにやりたい人が声かけすると、わらわら周りに集まってくるという中心を持たないものかなという。特にインターネットの考え方なんかはまさにそういったものだと思いますので、オンラインの可能性というところは誰でも主役になれる、主人公になれるという、既存のものとは少し切り離れたところでの動きというのが都会でも農村でもできるようになったということが1つ鍵になのかなというふうに思っています。

【谷口委員】 どうもありがとうございます。

【小田切座長】 ありがとうございます。

1つだけ私から。どなたでもいいんですけど、お尋ねしたいんですが、そうすると、従来型の県人会が関係人口論的な議論の中で今後登場してくる余地はないという議論ですか。

【嵩委員】 それはないと。

【小田切座長】 そうすると、もしあるとしたらどこにあるということになりますか。そこは政策論的には明確化しておいたほうが良いと思うんですが。

じゃ、岡本室長、お願いします。

【岡本委員】 やっぱり関係人口というところで、今さっきの指出委員の、いわゆる当たって見たけど、手を挙げてくれる人はいなかったよというところと、今さっきの中島委員の地域の課題は何ですかと言ったときに誰も言わなかったというのとよく似ていると思うんですね。そうじゃなくて、中島委員さんの場合は、それが地域のもったいないことというふうにして、そこでプロジェクトベースにされたわけですね。プロジェクトベースにすることでそういう関わりの余白が生まれて、そこに出てきたというところで。ですので、やっぱりそういう県人会とか、若者とか、同窓会なんかに入っている人たちというのは、地域にとっては貴重な関係人口の母体であることは間違いないと思うんですよ。その人たちにどう

いうふうに地域の関わりしろをつくっていくかというようなことじゃないかなと思っております。

【小田切座長】 ありがとうございます。この点、指出委員、いかがでしょうか。

【指出委員】 ありがとうございます。実は県人会的、それからもともと出身のコミュニティから関係人口の講座をつくったこともあるんですね。面白かったのは、全くその地域に属性は持たないとか、そういうことに属していない人たちが集まる講座と、あとは自分たちの好きなまちを何とかしようみたいな講座とはその後の発展の仕方が大分違ったというのは感じました。それはまさに偶発性の議論につながるんですが、思いもよらないアイデアが生まれやすいのは、そもそも自分たちのまちのことを知っているという認識の下に集まるコミュニティよりは、知らないのでいろいろなことを教えてもらうという吸水力の高いコミュニティのほうが、実は面白いことが起きた。それはすごく感じているので、どちらかというと、僕としては、前者の型のコミュニティの作り方のほうが行政の方にとってとか、僕たちにとってみても、新しいことが起こりやすいコミュニティには育っていくなというので、そちらのほうを意識・優先しているというだけです。

【小田切座長】 この新旧の関係人口コミュニティの違いとか、あるいは両者の役割分担、あるいは連携の仕方は今後課題となり得るかもしれませんね。我々の検討課題として残しておきたいと思います。

それでは、オンラインのお二人から、何か御質問や御意見はございますか。

【多田委員】 じゃ、よろしいですか。

【小田切座長】 じゃ、まず、多田委員からお願いします。

【多田委員】 鳥取県の取組について岡本さんに伺いたいんですけども、部署がまたがって活動されているかと思うんですけど、行政とかって、そういうふうにまたがってやるというのは難しいようなイメージもあったりするんですが、実際、どのようにやっていったとか、何か苦労した点があるとか、そういったのを伺いたいなと思います。

【小田切座長】 あわせて観光、関係人口、移住・定住、三者一体的に取り組むことによってどんなメリットがあるのか。多分今の御質問とつながることだと思いますので、お願いいたします。

【岡本委員】 そうですね。苦労というか、県庁のあちこちにあって、それぞれの課が自分のやっていることは関係人口だという認識がほぼないと。ですので、おおよそ極端なことを言ったら、その地域外に関わるものというのは、多かれ少なかれ関係人口政策なんですよ

ね。ですので、どっちかという、薄まきに組織のあちこちに存在しているというものをどういうふうにやって関係人口だと認識してもらおうかというのがまず問題点と。ですので、うちも全部つながろうというよりは、その中でも特に縁が濃いところ、例えば関係人口になってくる人で、もうちょっと深く体験したいんだけどなといったら、お試し移住のほうに持っていくであるとか、起業とかサテライトオフィスとかに関心があるんだけどというような話になったら商工部局とか、どちらかというとその都度その都度アメーバ的に触手を伸ばして組織とつながっていくというようなことでやっております。

【多田委員】 ありがとうございます。そうしたら、それは結構岡本さんみたいに感度が高い方が臨機応変につないでいるみたいな、そういうイメージなんでしょうか。

【岡本委員】 そうですね。今は取りあえず立ち上がったばかりの組織ですので、そういうつながりの例をつくっていつているというような段階です。ですので、これが例になって、ここここがつながるんだというところをどんどん即席に人をつないでいくというのが、私が今やっている段階ですね。

【多田委員】 ありがとうございます。

【小田切座長】 今の点なんだけど、組織図を見ると交流人口拡大本部、その下にふるさと人口政策課、そして関係人口推進室、3層なんですけど、交流人口、ふるさと人口、関係人口と3つの人口概念がありまして、今のお話を聞くと、むしろ最上位概念が関係人口、というふうにまとめてありますが、関係人口が全体を統括するような概念に将来的にはなる可能性があると考えてよろしいでしょうか。知事でないので、お答えづらいと思いますけど。

【岡本委員】 ただ、やはり観光部局で、じゃ、自分たちがやっていることが交流人口かという認識がどこまであるかということになりますと、今のKPI、いわゆる観光入込客数とか、宿泊客数というようなKPIではなかなかそこまで行かないということになると、それに関係人口というのが一つ大きなキーワードになるんじゃないかというふうに知事が考えたのではないかと思います。それで、関係人口推進室という、全国でも珍しい室を置いたのではないかなと思っております。

【小田切座長】 ありがとうございます。

それでは、石山委員。

【石山委員】 たくさんの事例をありがとうございました。非常に多様な事例をいただいております。おなかいっぱいというところもあるんですけども、一方で気になった点で言いますと、関係人口のきっかけが個人視点でそもそも何かしらの興味があるという方が行くような事例

というのが多かったのかなと思っておりまして、鳥取県さんが最後にワーケーションのお話がありましたけれども、もともとは前提として興味がなかったんだけれども、転勤でそこに行くと、実際はめちゃめちゃよくて住み着いてしまったみたいな、そういったもともとのきっかけが企業とか、仕事とか、半強制的なものなんだけれども、実際はその層というのが実は潜在層というか、可能性の潜在層としては非常に大きい人口を占めるんじゃないかなと思っておりまして、もう少し企業とのコラボレーションのような事例というのを聞いてみたいというふうに思いました。あとは、こういった経済団体だったりとか、企業も組織しているようなネットワークだったりとか、そういったところとどういった結びつきをつくって、きっかけを創出できるかというところももう少し議論が必要なのではないかなと思います。

以上です。

【小田切座長】 ありがとうございます。とても重要な議論だと思いますが、この点はいかがでしょうか。じゃ、岡本委員、お願いいたします。

【岡本委員】 ワーケーションのお話が出ましたので、言われるとおり、例えば企業の研修とか、企業でワークキャンプとかいう形で来ていただいているのは偶発性ですよ。自分が選んだわけではなくて、地域に偶発的に関わると。ただ、そのまま例えばワーケーションだけして、旅館に缶詰めになって仕事をしたり、観光したりして帰っていただくというだけでは、地域とのつながりとか、偶発的な人間関係づくりにはつながらないと。ということで、ワーケーションを進めるに当たって我々が考えておりますのは、いかに地域につながっていただくかということで、入っていただいたときに地域の交流相手をどういうふうに紹介していくかということを重視しております。

それと、1つつくっておりますのが、鳥取県においてはワーケーションに合わせて地域交流とかに入っていただいたら、宿泊費の一部を支援させていただくという制度を設けております。あわせてお子さんを連れてきていただいたらお子さんの分も出しますよみたいな形で、地縁を深めていただくというような仕組みが必要だと思っています。大体ワーケーションと言っても1泊2日とか、2泊3日ぐらいで帰っちゃうという例が割と多いと聞いております。ですので、3泊以上とかというふうに伸ばしていただくためにもこういった地域に関わる活動というのが1つキーになっていくのかなと考えております。

以上です。

【小田切座長】 ありがとうございます。そうですね。今、ちょうど御指名しようと思

ました。中島委員、お願いします。

【中島委員】 ワークーションの件、実は私も石山さんと同じ質問を岡本さんにしたいなと思ったところだったんですけども、実は、私の会社というか、私自身もなんですけど、先週1週間、リモートワークウィークと勝手に名づけて、リモートワークを推奨している企業、そしてリモートワークを推奨されている社員、そして、リモートワークで来てほしい地域の方々という人たちと1日ずつ、オンラインで対談して、どのようにしていけば進むのかというのを、実は夏休みの自由研究のようなことをやっておりました。都市部の方々からのいろいろな意見があったんですけども、まさに今岡本さんがおっしゃられたように、どのように地域にかかわるのかということにもものすごくテーマを持っていらっしゃる。具体的にはすごくシンプルな言葉で言いますと、副業であったり、企業側がリモートワーク推奨及び副業も推奨していくというケースが増えているというところで、副業をぜひしてみたい。だけれども、自分のスキルをどう生かせるのかが分からない。比較的こんなことをしてほしいですというふうに地域側から出てきている内容が専門職系のものが多いということで、大半の方々は専門職というか、企画であったり、営業であったりというようなお仕事の方が多いと思うんですけども、何を専門というふうに呼ぶのかもありますが、なかなかそこが難しいとか、あと大学時代にアルバイトをしていたときのように、掛け持ちでやっていくような生き方をしたい。複数のなりわいで生きていきたいみたいなことも考えたいんだけど、何からやったらいいか分からないみたいな話も出てきておりました。やはり人のつながりがある。そして、つながりを持ちたい。世代間のつながりがあるような地域に関わりを持つにはどうしていったらいいのかというような話も出ておりました。

今の話とは、蛇足なんですけど、3つあったうちの最後の1つが自然の中で働きたいという話がありまして、都市部の方々、自然に飢えていらっしゃるところもあり、手の届く距離にある自然の中で働きたいというお話もございました。そういう中で言うと、ワークーションの推進ということ自体が地域側とどう向き合っていくのかということからは、今後、母数という意味合いで言うと非常に大きいので、関わり方をどうつくっていいのかということからは明るい未来だなというふうに思いますし、研究していきたいなと思いますね。

【小田切座長】 ありがとうございます。企業の動きがまさに始まっているようです。ありがとうございます。ぜひお願いいたします。

【岡本委員】 今の話なんですけど、これもやはり関係人口と一緒に、地域の関わりの余白、関わりしろという話だと思うんですね。あと実を言うと、コロナの関係で中止になった

んですけれども、今週末、本当は東京のワークデザインラボさんという副業の集団の方に鳥取県の倉吉市に入らせていただいて、まさに地元の企業さんが自発的に受皿になるみたいなところからスタートしたんですけれども、それにうちが地域の短大とつながらせていただいたり、行政機関とつながらせていただいたりということで交流を広める中で、その中でいろいろ関わりしろというのを見ていただこうというようなことを思っていたものでございます。

あと各自治体において、ワーケーションと関係人口が全く別々の部署が持っているところがあるんですけど、これも関連づけという議論というのが必要なのかなというふうに思っております。

【小田切座長】 ありがとうございます。まさに新しい議論をいただいたというふうに思っています。

さて、それでは、先ほどの資料1の19ページの3つの論点ですね。ここを意識しながら、さらに議論を進めていきたいと思えます。まず1つ目は地域における理想的な関係人口の在り方、2つ目は関係人口との連携・協働のイメージ、それから3つ目は地域側が整えておく必要があるもの。むしろ3番目がかなり議論されているのでしょうか。1番目、2番目が必ずしも分厚い議論が出ておりません。ということで、いろいろなお話をいただければと思えますが。

それでは、私から。指出委員にいつものように目が覚めるような御報告をいただいて、特に新しい御報告として駅ビルを場として使っているという話は大変驚いたんですが、その中に関係人口も定住人口も混ざり合うような仕組みというのが意識されているのでしょうか。そして、何よりもしまコトアカデミーをはじめ、小さな場づくり、我々の言葉で言うと縁側づくりというのはいろいろなところで見たわけなんです、それが駅ビルというスケールでつくられているということは初めて知ったものですから、その場のスケール感とか、大きい場のための工夫など、この辺お願いできればと思えます。

【指出委員】 博多南駅、那珂川市への玄関となる場所ですが、鉄道好きの皆さんは御存じのように、300円で九州新幹線に乗れるという乗り鉄の聖地でもあるんですね。もともとは違う指定管理の業者の方がやっていたんですけれども、那珂川市になるタイミングから、木藤亮太さんという油津の商店街の再生マネージャーを務められたすごく力のある方が入られて、あの場所は1階、2階、3階、4階とあるんですが、4階はグランピングができるようなバーベキューのガーデンになっていて、3階はコワーキングスペースです。2階

はカフェになっていて、2階は直接駅との行き来ができる場所です。1階はバスセンターなんですけど、レンタルスペースとギャラリーを兼ね備えています。どれも人が関わる関わりしるを意識した装置になっています。いろいろなジャンルの人たちが来るのが駅ですよ。例えば僕は東京の駅の乗降者数を結構気にしているんですけども、自分の家の近くでもある尾山台駅は1日に3万5,000人が行き来するんですよ。それは遠野とか、もしかしたら江津といった僕の大好きなまちの人口を超えている人たちがあの小さな駅を行き来しているのに、まちや地域に興味がない人のほうがまだまだ多い。そう考えると、駅という場所が一番人が接点接触率が高いところ。その場所に関係案内所をつくるというのは、今、日本の地域の駅の開発を意識している方々は、一番チャンスがある場所なのではないかと思いました。それを木藤さんが見事にやっていらっしゃったというのがあります。

1つポイントとしては、関わりしるというのはここで何かやってみたいなという気持ちを想起させることが大事なんですけど、その前の層の皆さんがいるわけですよ。何かやってみたいなという前の段階、もしくは自信がない若い世代。そういう皆さんがここで何かをやってみたいなと思ってもらうための方法としてそこに人の息遣いを置いたんですよ。2階は人の息遣いを意識しています。自分が何かをできなくても、ここに人がいるので、ここで勉強してみようかなとか、そうやって、ここに誰かがいるから友達はいないけど、知り合いは直接はいないけど、あそこのカフェのお兄さん、お姉さん、何か面白そうだから、その周りにいようかなという一つのポイントの最大の広い半径の中の人たちをどこまでここに引き込めるかというのを、先ほどの3人の木藤さんをはじめとした素敵なプロジェクトメンバーが実践している。その中で大学生たちが楽しそうだなと思って、その2階のカフェを接点として自ら自分で地域づくりの真ん中に立つ事例が後を絶たない形になりました。みんな声をかけたわけではありません。自発的にここでアルバイトをしてみたいとか、たまたまやっていたイベントやワークショップに顔を出した結果、交流が生まれたとか、そういうことが生まれる場所として駅を使っている。これはもしかしたら駅の新しい利用方法なのではないかなと思って、関係案内所の一つの例として挙げさせてもらいました。

【小田切座長】　そこには、そうすると、あまりサイズ感は小さいほどいいとか、大きくては駄目だとか、そういう適正なサイズ感はあまりないんですよ。

【指出委員】　サイズ感はきつくないんでしょうね。もう一つ違う例として、先ほどの各務原市なんですけど、各務原市は巨大なイオンモールがある場所なんですけれども、そのイオンモールの若い人たちが週末往来する中に、各務原市は移住・定住の相談所をつくっている

んですね。これはものすごいことなわけです。多分本当は商業施設ですから、そういう地域づくり的なものをつくるのがピッタリと合っているのかどうか分からないという中で、各務原市としては、自分たちのまちに接点を持つ人たちがこの巨大な自分たちのまちと同じぐらいの人口がそこに集まっているかもしれない場所にサテライトのオフィスをつくったというのが、要はどこから人が流入していったらいいかというときにそのスペースは決して大きいスペースじゃないんですけども、でも迎え入れようとしている想定の人たちというのはもっと巨大なわけなので、そう考えると、今自分たちのまちの中でこれだけの人たちが漏斗のように1回ここに集まるところはどこなのかということ考えた結果、それが駅であったとか、イオンモールであったということなんじゃないかなと思います。

【小田切座長】 ありがとうございます。国交省的な課題満載の議論になってきましたので、ぜひこれは事務局もオブザーバーの皆さんも議論に関わっていただきたいと思います。いかがでしょうか。何か御質問がある方は遠慮なく。いかがでしょうか。それでは、まず藤田課長から。

【藤田課長】 今までいろいろ具体的な事例をお伺いして、お話を伺ったんですけども、皆さん方の御報告になると、成功した事例の話が中心になるものですから、どういうことでやればうまくいって、どういうことでやればうまくいかないのかというところを行政としてはエッセンスを抽出していくという作業が多分必要になってくると思うんですね。交流人口をこれからどういうふうにするかということについて、どのようなエッセンスが大切なのか。先ほどのお話からすると、漏斗のように場所に集まるところを、拠点みたいなものをどううまくセットするのが大事なのかとか、その辺りのエッセンスみたいなものを御議論いただくと大変ありがたいかなと思っております。

【小田切座長】 この点については、まず指出委員ですね。

【指出委員】 ありがとうございます。

これは2つの視点があって、先ほど人が1回ものすごい圧で集まる場所をその地域の中から探すというのは大事だという話がありましたが、もう一つは地域の盛り上がりは定点で拝見していると属人的なものが多いんですね。そのときにもものすごく力のある人がその場所をつくってそこに新しい人がやってくるというものが、じゃあ20年、30年続くのかというと、最初につくった人以上のパワーのある人は現れにくいんだなというのを感じています。なので、僕はもしかしてむしろ遷都みたいなものがあるのかなと思ったんですね。要はその場所がハブになっている時代がある程度役目を果たし終えるタイミングに、違う

場所に遷都する。関係案内所を遷都していく。違う場所にもう一つ、違う属性の人たちがつくることでさらなる新しい関係人口の流入が保てるみたいなことです。要は3つの古民家があったら、5年ずつずらして、その古民家を関係案内所として使っていくみたいなことでもいいと思うんですね。そういうふうに今思っています。継続するというのを広く捉えるとしたら、その場所だけに託すのではなく、その地域の中で時期をずらしながら継続していくということも大事かもしれませんというふうに思いました。

【小田切座長】 地域づくりの中では軸ずらしという言葉もありますね。まさにそこを言っていたいたんですが。軸ずらしの一例として、中島委員に御報告いただいたように、課題ありますか、ありますか、ありますかと聞いても出てこないということですね。ずらして、もったいないものは何ですかという。このインプリケーションというか、これは何ですかね。地域を追い詰めないとか、あるいは時間をきちんと取るとか、先ほどのようにプロセスを踏むとか、どういうふうに総括をされていますでしょうか。多分それが藤田課長のご質問に対する答えの一つになると思います。

【中島委員】 そうですね。まさに軸をずらすということが地域の方々にとっても結果的にいかに自分ごとができるかどうかという、すごくシンプルに言うとそういうことなのかなと思います。その場に集められたからとかではなく、自分の御自身お一人お一人の地域の方々にとって、身近な言葉であったりとか、身近な方々とお話をしたり、その時間をちゃんと保ったりすることをちゃんと用意できれば、うまくいくと思いますし、やらされ感みたいなものが出てきてしまったり、どうしても何かしらのそういう集団の中で立ち位置だったりとか、過去のいろいろなしがらみみたいなものは恐らくどの世界にもあると思いますので、そういう背景の中で取り組んでしまうと本来のもので出てこない。本来の、先ほど私が申し上げたような課題と言ってしまうとなかなか出てこないんですけれども、もう一步進む、もしくはもう一步下がるみたいな軸をずらすことで出てくるようになってくるのかなというところで、自分ごとかという言葉がちょっと正しいか分からないんですが、それを実行しない場合に失敗するケースというのが多々あるのではないかなと思います。

【藤田課長】 ありがとうございます。

【小田切座長】 今の議論、多田委員、いかがでしょうか。関係人口をつくっていく上で、いろいろな御苦労があったと思いますが、少しお話をさせていただいてよろしいですか。

【多田委員】 そうですね。指出さんがおっしゃっていたのがかなりそうだなと思うんですけれども、基本的には地域の中でリーダーシップを取って推進しようという主体性の高

い個人の方がいるかどうかというのは結構大事でして、うまくいかない場合って、結局、場づくりみたいな、箱物だけ真似して、行政主導でこういうことをやりませんかとかと言ってやるので、さっきやらされ感という話が出ましたけど、うまくいかない。なので、逆にそういうプレーヤーの人で相当やる気の高い人というのを発掘してくるというのが行政の方とか、外部から関わる方というのは重要で、外から関わる人って取っかかりがあまり、個人的なつながりがない人って行政経由で入っていこうというのが多いと思うんですね。そうになると、行政とそういう外部の人だけ盛り上がって、中のは置いていかれちゃうみたいになってしまう可能性がありますので、行政とかが関わっていようが関わってまいが、何とかやっていきたいみたいな、そういうやる気のあるプレーヤーがいるかどうかということが非常に重要であると思います。

【小田切座長】 どうもありがとうございました。

それでは、田中補佐から。その後、農水省の佐藤補佐と。

【田中課長補佐】 すみません。ちょっと話が戻ってしまうんですけども、地域と関係人口の偶発性を生み出すためには人が集まる場所に何か仕掛けをつくるということだと思います。例えば駅とか、イオンモールみたいなところ、人が必ず集まってくるところだと思いますけれども、そういうものがないような中山間地域とか、地方の田舎みたいなところで、そういう偶発性を生み出すためには何をしたらいいのかなと今悩んでいます。何かヒントになるようなことは、指出さん、ないでしょうかね。

【小田切座長】 これは指出委員の後に嵩委員、お願いいたします。

【指出委員】 ありがとうございます。まず、中山間地域や地方では地域の個店がその役割を大きく担っています。お菓子屋さんや雑貨屋さん、八百屋さん、居酒屋さんなどが、そういう関係人口を生み出す関係案内所の役割を果たしている実例が顕著です。

そしてオンラインの多田さん、石山さん、よろしくお願ひします! というのは、多分お二人が今いらっしゃるところが、まさにそのポイントだと思うんですね。石山さんは今大分にいらっしゃるのかもしれませんが、多田さんは十日町にいらっしゃって、その場所には駅ビルとかイオンモールとかという、そういう大型の施設はないけれども、人を引き寄せられる空間や環境や現象があると思うんです。なので、それを多分お二人が語っていただくと、すごく分かりやすいのではないかなと思います。例えば十日町は駅前の施設ももちろんいいんですけれども、多田さんの池谷集落に遊びに行ったりすることで、そこから関係人口が広がっていくといういい例がたくさんあつたりしますので、ぜひお二人にお話を聞いてい

ただけると、僕の伝えたいことと同じだと思いますので、田中さん、いかがでしょうか。

【小田切座長】 それでは、石山委員が実は50分に御退席されますので、今のことに對する回答だけではなく、加えて何かあればまとめて今御発言いただければと思います。

【石山委員】 そうですね。今配信しているここは大分県の豊後大野市という非常に田舎でして、まずイオンモール等はないです。1時間ぐらい乗らないとないですという場所で、道の駅は10キロ圏内であって、車で10分程度で行ける距離にあるんですけども、むしろ道の駅以外は何かそういった候補になるところというのは基本的になくて、そういう意味では道の駅、よく訪れるんですけども、コミュニティにはなっていないので、道の駅に多様なセクターが集まる一つの候補地というか、可能性がある施設のような気がしています。

もう一つは、飲食店や例えばパン屋さんとか、そういったこちに東京や都心から移住してきてお店を開業しているような比較的若い世代の40代とか、方々の店舗を経営している経営者さんなんかに関しては、自分たちの飲食店や事業のほかにまちづくりに関わっているケースが非常に多いなというふうに感じておまして、多くのまちのコミュニティやイベントの参加はそういった飲食店の店長さんとか、店舗の方からお誘いをいただいて行くケースというのが多いかなと思います。

以上です。

【小田切座長】 ありがとうございます。

ほかに全般的に何か御発言があればと思いますが、大丈夫ですか。

それでは、多田さん、今の御質問に対していかがでしょうか。

【多田委員】 そうですね。偶発的に人が関わるようになるきっかけとしては、中越の場合、中越地震がありまして、池谷集落も中越地震のボランティアの人がたくさん訪れたというのがありまして、さっきの嵩さんの話で、中越防災安全推進機構さんなんかも、震災復興の流れから地域づくりをやるような動きで、活動が進んでいって、インターンの受入れとかやられている格好になっていまして、そういう場がなくても、ボランティアの人がわっと来るといって、不特定多数の人がいっぱい来ますので、そういうきっかけになるんじゃないかなと思います。これは狙ってできる内容ではないのかなと思いますね。

もう一方で、十日町市の場合、大地の芸術祭がありまして、こちらは3年に1回やっているんですけども、たくさんの方が来るといって、大地の芸術祭はこへび隊というボランティアみたいな格好で準備に自ら関わる、そういった仕組みがありまして、そこに参加する

人なんかは結構関係人口になったりしているというケースもありますね。

以上です。

【小田切座長】 ありがとうございます。

じゃ、続きまして、嵩さん、いかがでしょうか。あえて質問をしぼりますが、そういう関係人口が集まるような縁側に相当する新しい機能というのは何なのか、あるいはそこでどのように定住人口とごちゃ混ぜになっていくのかという、この辺りの知見があればお願いいたします。

【嵩委員】 そうですね。基本的には関係人口というと自分の中でも苦慮しているというか、まだ整理ができていないんですけれど、地域に行くというよりもその人に会いに行くというのが根本かなというふうに思っています。その人に会いに行く方法がオンラインに変わったかもしれないんですけれど、会いたい人がいるかどうか。会いたい人を広げていく場づくりが今小田切先生が質問されたことかなと思うんですけれど、場づくりって、実は、私も9年小国でそういった場づくりをやっていて、非常に苦労したんですね。ツールをいろいろ使って、例えば地域通貨がツールになるんじゃないかということで、地域通貨を使って場づくりをしようとか、いろいろ試行錯誤はしたんですけれど、結局、そういうツールって結果的に交流が——当時は交流と言っていましたけど、交流が進むと要らなくなってしまうと。人と人の関係になってしまったら、本当に地域通貨そのものが要らなくなってしまうというものになっていったというのがあって……。

ただ、1つ言えるのは、場としての箱は最低限要るんじゃないかなと思いました。私がいいた木魂館という交流施設がまさにそうなんですけれど、そこに行けば誰がいるよねという場ですよ。先ほど指出さんの事例でもあった駅の中がそこに行けば誰がいるだろうという。まさに誰かに会いに行ける場があるかどうかというところだと思っています。それが箱物ありきではなくて、そこにいる人、やはり人なんです。ただ、それは時代とともに入れ替わってもいいし、あるいは役割を終えた、先ほど遷都の話じゃないですけど、またその場が違う機能を持った場がどんどん広がっていくと、それはそこに関わる人がどんどん増えていきますので、そういった意味での関わりしろというか、関わる場をつくるという。空間的な関わり場の場をつくるというところは当然もっとやる必要があると思いますし、逆に空間がインターネット空間に広がっていても、多分、部屋——部屋と言っているのかな。それも場だとは思いますが、そのルームにインした——すごい古い表現ですけど、そこにインしたら知り合いがいるという。そういった空間づくりというのももしかしたら今

後必要になるかなという気はします。

【小田切座長】 ありがとうございます。今の人が人を呼ぶという変化、それと場の機能もそれに伴って変わっていくと整理することによって、その場面場面でどのような政策が必要なのかということも出てくるような直感を持っております。さて、それでは農水省の佐藤補佐、せっかくですから。

【農林水産省】 農林水産省の佐藤です。うまく整理立ててしゃべれるか分からないんですけど、事務局の資料の15ページとか、16ページ辺りを見てのことなんですけど、関係人口が増えるメリット、関係人口の地域づくりへの関わりのイメージというところで、関係人口が増えると地域づくりが活発になりますという方向でできている資料なんだろうなと思って見てはいるんですけど、そもそも我々も地域づくり人材を考えている立場なのに、それで聞くかというのはあるんですけど、地域づくりって何だというのがこの資料を見ていて逆によく分からなくなったなと思っていて、将来像をイメージ、実行計画を策定、実行を主導という流れは、多分イメージの一つでしかないと思うんですけど、そもそもこういうことを全ての地域がしているわけではないですよ。一方で、地域というのは、地域づくりの場だったり、なりわいの場だったり、暮らしの場だったり、いろいろな意味合いを持っているわけですね。そのときに関係人口が関わるというのはもっぱら地域づくりのためなのか。暮らしのためとか、なりわいのためとか、いろいろな関わりがあるのかなということと、そもそも地域づくりとは何なんだろうということを思いました。また、地域という言葉自体も、実際地域という主体が、地域活動をしているわけではなくて、無数の活動をしている人たちの集合体であり、場合によっては地域活動ですらなくて、個人活動だったりもすると思うんですね。そういうものすごく多層な構造である地域というのを考えるときに関係人口というのがどう関わっていくのか。自分たちも地域づくりというのを考えてはいるんですけど、そもそも地域づくりというのが何なのか、地域づくりのメリットは何なのか、といった整理があると、関係人口の役割がもう少し多層的になってくるのかなと思いました。

【小田切座長】 ありがとうございます。そのような議論をしていただき、大変うれしく思います。こういうふうにかえたらいかがでしょうか。地域づくりと関係人口、あるいは移住の好循環をここではモデル化しております。それに対して、佐藤さんがおっしゃるように、地域づくりや関係人口と好循環しない地域づくりも想定して考える必要があるのではないかとことだと思えます。地域づくりが関係人口や移住との関わりがなくてはいけないということを前提に議論しているんですが、果たしてそうなのかという問題提起はあり得

と思うんですね。そのように私たちもいただいた問題提起を受け止めてみたいと思います。ありがとうございます。

今の論点について、どなたかいかがでしょうか。御発言ありますか。

【多田委員】 よろしいですか。

【小田切座長】 はい、お願いいたします。

【多田委員】 私は地域おこしという名前のNPOをやっています、まさにどうということが地域おこしだということを明確にするのが大切だと思っています。これは自分なりの答えなんです、私たちは集落がほぼ消滅しているような状態になっていますので、そこをしっかりと後世に残していくとか、継承していくと。だから、子供とかが生まれてちゃんと生活が成り立つ状態につくっていくという。そういったものを地域づくりというふうに、地域おこしとか、地域づくりというふうに考えていまして、そのために外から人を呼ばないと消滅しますので、呼ぶと。棚田をしっかりと維持して、棚田がなくなってしまう、耕作する人がいなくなると、大雨が降ったとき、洪水被害がよりひどくなりやすくなったりしますので、そういったことをちゃんと維持できるように農地を管理すると。この広い農地を管理するに当たっては人手が必要になるので、人を呼び込んで、ともに担い手になってくれるような人を誘致していくという、そういった格好で考えているわけですが、これってうちの集落は小さいからというだけじゃなくて、日本全国、津々浦々どこでもそうだと思っていまして、もっと時間軸を長くしたら東京だってどうせ人口は減りますし、結局、日本全体、同じだと思うんですね。なので、地域づくりとかいうのは、地方創生とか、多分、誰も答えが分からなくてやっているかもしれない、大前提としてちゃんと日本の国土の中で持続可能に生活が成り立つ状態をつくるという、これを考えた形で地域づくりをやっていくというのは非常に大事だなと思っています。なので、ちゃんと食糧とかエネルギーとか、生活に必要なものが賄える状態をつくっておかないと、もし逆にそれがちゃんとできていれば、コロナで多少観光業の人が苦しんでも、じゃ、食糧を全部配りますとかできるので、そんなにその人たち、金もうけはできなくなっても生活の維持ぐらいできると思いますので、そういったことをちゃんと国の大方針として考えていただけるといいのかなとは思っております。

【小田切座長】 どうもありがとうございました。今いただいた御発言も含めて、我々なりに地域づくりを改めて考えてみたいと思います。

さて、それでは、総合討論の時間を最後に残したいと思いますので、少し予定より早いん

ですけど、アンケートといいましようか、今年度調査の実態把握について御説明をしていた上で、今の論点も含めて全般的な議論をしてみたいと思います。ということで、小田桐企画官、お願いいたします。

【小田桐企画官】 それでは、資料1の20ページ以降、今年度実施する予定のアンケートの内容について御説明をさせていただきます。

21ページ目が今年度実施する実態把握の特徴でございます。昨年度と違いまして、全国レベルで実施するというところになります。

22ページが昨年度のものと比較したものでございまして、特に下から2段目でございますけども、三大都市圏とその他の地域ということで、それぞれ一次調査で6万サンプル、二次調査で2万サンプルという形で調査を行う予定でございます。

調査のフローが23ページでございます。新型コロナの感染拡大という事態も踏まえまして、調査を設計しております。まず一次調査で、過去、新型コロナ感染拡大直前の状態を把握いたします。二次調査ということで、過去、現在、将来、これはコロナ終息後を想定していますけども、そちらについて把握していくという2段階の調査を想定しております。

24ページが調査の対象範囲ということで、先ほど申し上げましたとおり、三大都市圏とその他の地域ということで、その他の地域のサンプルの割りつけにつきましては、ブロック単位で実施することを今のところ想定しております。

以下、調査の詳細でございますけども、大きく3つございまして、まず25ページ目は、1つ目、関わり先の詳細な把握ということで、こちらは昨年度より、どのような特徴のエリアで活動しているかということ、選択肢を少し細かく設定しております。

26ページ目が2つ目の地域との関わり方の詳細についてでございます。まず一次調査では多地域居住ですとか、2地域居住、あとオンライン関係人口に関わる選択肢を新たに付け加えております。

27ページ目が二次調査の関係でございます。まず調査する内容として活動力ですとか、活動量の把握、また、28ページで地域での過ごし方の詳細化ということで、こちらは現地でどのような過ごし方をしているかということ、調査項目を細かめに新しく設定しております。

29ページが調査項目の3つ目、関係人口の動態性ということで、29ページでは、まず、きっかけに関してPUSH要因とPULL要因という観点から選択肢を拡充しております。

30ページが、取組の深化、新型コロナウイルスの拡大の影響ということで、こちらで先

ほど申しあげましたとおり、過去、現在、将来の時間軸で把握しようとしております。特に、地方での過ごし方に関しましては、地域との関わりを始めた当初と、コロナウイルス感染拡大の直前という2時点を調査することで、関係人口の活動力のステップアップ、変化の実態を把握したいというふうに考えております。

31ページは、コロナをきっかけとして地域との関わり方がどのように変化したかということ把握する質問を用意しております。

32ページ目が、昨年度、今後の地域との関わり方という将来について設問しております。今回は、現状ではコロナの終息が見えていないので、コロナが終息した後の意向ということで質問を位置づけております。

詳細は33ページ以降でございます。赤字のところは昨年度から変更、ないしは追加をした部分になりますので、御覧いただければと思います。

少し飛びまして、36ページになります。一次調査で地域との関わり方の中にオンライン関係人口を追加いたしましたので、二次調査でもオンライン関係人口でどういうことをしているか、どこに行っているかという趣旨の設問を追加しております。

最後に、この調査全体の流れでございます。本日、御議論をいただきまして、また、アンケートの開始は9月中旬を予定しておりますので、まだ少し時間がありますので、また、詳細な点がございましたら、本懇談会の後でもお受けすることができるかと思いますが、9月中旬にアンケートを実施いたしまして、9月下旬に回収、1次集計を行いまして、今のところ10月27日に予定している第3回の懇談会で、まず一旦、御報告できるかなと思います。その後、関係人口の傾向ですとか、課題の整理など、委員と適宜調整をさせていただきまして、年内に整理を行いまして、第5回の懇談会で御報告をさせていただくと、こういう時間軸で考えております。

本日、また御議論いただきまして、実際のアンケートを進めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

私からは以上です。

【小田切座長】 どうもありがとうございます。

関係人口施策は、様々な省庁が関わっております。中でも、関係人口の定量把握というのは政府の大きな課題となっております。昨年度、三大都市圏で3万サンプルの調査をさせていただきました。今年は、それを4倍にして12万サンプル、そして、地方圏も含めた調査という、かなり充実した調査を設計がされております。この設計をめぐっては谷口先

生にかなり関わっていただきました。補足的な何か御意見など。お願いいたします。

【谷口委員】 谷口です。非常に精力的に新しい調査項目も加えていただきまして、どうもありがとうございます。3点ぐらい、ちょっと確認と共有しておきたいこともあるので、一つ一つ行きたいと思うんですけども、1つは、全体のサンプルの取り方というか、考え方なんですけど、昨年度は訪問型と非訪問型の2つの中で、訪問型だと答えた方には非訪問型の内容をお尋ねしなかったという調査構成だったんですけども、今年はその部分は訪問型だというふうに答えた方も非訪問型の行動を確認するという理解でよろしかったですかということですか。

【田中課長補佐】 今年度の調査につきましては、訪問型で訪問している場所については非訪問型の関わりについても併せて聞くということで設計しております。

【谷口委員】 あと、併せてなんですけれども、去年はたしか実家に帰るとかという方はサンプルから除いていたように思うんですけども、あんまり実際調査、一次調査ではさほど数が多くなかったの、今年はそのも含めて調査されるという理解でよかったですか。その場合、サンプルがそこででかくなり過ぎないように層別化されるかどうかということの確認もさせていただきます。

【田中課長補佐】 昨年度は実家に帰る人も一部二次調査の対象となっていて、それはどういう人かという、盆、正月を除いたときに実家に帰っている人は二次調査の対象となっていたんですね。盆、正月の期間のみ実家に帰っている人、これは帰省だけを目的としている人なんですけれども、そういう人たちは二次調査の対象となっておらず、割合がそんなに大きくなかったと。3%程度だったと思うんですけども、数字はすみません、正確でないかもしれませんが。ということもございましたので、お盆・正月に帰省を目的として実家を訪問している人を二次調査の対象としてもそんなにボリューム的に大きくなりたくないという想定をして、今回二次調査の対象としているところでございます。こちらにつきましては、事前調査の中でどれだけの割合の人たちが二次調査に進出するのかということのをあらかじめ調査することができますので、その結果を見ながら、最終的にどこまで二次調査の対象とするかということは判断したいと思っております。

【谷口委員】 分かりました。

2点目なんですけど、すみません。2点目は29ページですね。29ページで、これは去年やっていなかったというか、考え方なんですけれども、PUSH要因、PULL要因という考え方を入れていただいているということで、これは割といろいろな人間だけじゃなく

て、企業の移動なんかも分析するときにはPUSH側とPULL側と整理するというのは非常にクラシックで有効なやり方なんですけれども、これを取り入れていただきましたということです。この中でポイントが2つあるかなと思っていて、僕はまだ詰め切れてないかも分からないと思うんですけども、PUSH要因の内的要因というのがあって、都市側から出ていく人がどういう理由で出ていくかというときに、去年はネガティブな要因を全然入れてなかったんですね。要するに、都会での生活に疲れたとか、今の東京の企業はちょっとブラックだから嫌だとか、そういうファクターというのは全然聞いてなかったんですけども、そういうのはどうしましょうかということですね。これがPUSH側の内的要因です。微妙な形で入れていただいている。「現在と異なる暮らし方を求めて」とかというのは、微妙にそういうのが今年入っているんですけどもということですね。

あと、29ページの下の方にPUSH及びPULL要因と書いてあるんですけども、個人的には僕はここはもうちょっと攻めたほうがいいかなと思っているところで、ここは何かという、つながりサポートなんです。つながりサポートというのはPUSHでもPULLでもないと思っていて、この研究会で新たに提案するファクターだと思っていて、ここは小田切先生に何か名前をつけていただくとありがたいなと思っているというところなんです。それがこのファクターの2番目のところのお話。これはちょっと御意見とか、議論とかいただいたほうがいいかなと思うんです。

3点目はその後でまた。

【小田切座長】 今、谷口先生から問題提起いただきました。それでは、谷口先生、3点目を先に言っていただいて全般的に議論できればと思っております。

【谷口委員】 分かりました。

3点目は今年はオンラインの影響を調べるということで、オンラインの影響、多分26ページ辺りに入れてくださっているかと思うんですが、今オンラインでやられている方が将来移住してくれるかどうかはちょっとよく分からないわけですね。既に移住されている方にオンラインが影響しましたかというふうなことを、過去の経緯を聞くかどうかということがちょっと議論になったということです。これはいろいろ考え方があるんですけども、そういう議論をして、田中さんに大学から帰ってもらった後で、僕、たまたま資料6というのが、説明する気はないんですけども、どこかでそういう議論をしたなというふうな既視感があって、自分がペーパーを書いていたというのを後から……。これはただ5年前で、要するに、関係人口という概念もなければ、地方移住という調査でもないし、Zoomもな

いしという、そういう時代のものでなんですけど、問題意識は一緒なんです。このときの結果を見ると、一言で言うと、先ほど中島委員さんがおっしゃった自分ごとにはできてない人はネットを見ても行動に移さないというのが実は分析結果で出ているんです。そういうふうな状況、共通の状況は多分あるんじゃないかということと、ただ、今オンラインでいろいろやられている方というのは昔5年前とでも違う人たちがやられているんじゃないか。だから、昔どうだったかということを探ることによって何かこれからのことが分かるということでもないんじゃないかなという、その迷いが僕もちょっとあるんですけれども、要するに、今移住されている方に過去のオンライン経験を聞くことの価値があるのかどうかということですね。そのところはまだ私も迷っている部分がある。そこも含めて、御意見があればいただければと思います。

【嵩委員】 それに関する質問なんですけれども、よろしいですか。

【小田切座長】 どうぞ。

【嵩委員】 オンラインの活用のところで、いわゆるミーティングツールをイメージされて書かれているかなと思ったんですけど、情報収集の手段としてのSNSの活用というのは、恐らく移住された方は結構使われていると思うんですね。なので、情報収集のツールとして、オンラインコミュニティとか、そういったものに参加していたかどうか、そういったものってちょっとどこかで聞けるか、ここの中に入れてほしいなどは思いました。SNSのコミュニティ的なものからの情報収集ですね。積極的に発言しないけれど、コミュニティに入っていたというのは結構あるんじゃないかなという気がしています。

【田中課長補佐】 分かりました。オンラインを活用して地域と継続的に関わっているという選択肢は28ページの地域との関わりの詳細の把握というところがございますけれども、ここを相対的に明確につながっていること以外にも情報収集みたいな視点を入れるということは整理したいと思います。

それで、谷口先生から頂いていた宿題のところで、29ページ目なんですけれども、PU-SH要因、内的要因のところ、事前打合せさせていただいたときにマイナスの要因を入れた方がいいんじゃないかということをお願いしたんですけど、私としてはマイナス要因的なところを入れているというような認識でございます。例えば仕事に疲れたというところは働き方改革を意識して地域に関心を持ったとかですね。災害が怖いからという部分とかは自然災害を背景として地域に関心を持ったとか、そういうところに入れていただいているんですけど、もう少し明確にマイナス的な書き方をしたほうがいいというよう

な御指摘ですか。

【谷口委員】 いやいや、皆さんの御意見を聞ければと思っただけで。昨年度と明確に変わったところはお話ししておいたほうがいいかなと思って。

【中島委員】 谷口さんの話にあった今のオンラインで関わっていらっしゃる方にどうでしたかというふうに聞くべきかという論点にちょっと近いかもしれないんですけども、傾向としてこのタイミングで地域の関係人口を考えていらっしゃる方というのは恐らく1年ぐらい前と少し属性というか、意識も含めて変わられているんじゃないかなと思います。私は、毎月SMOUTのユーザーにお客様アンケートという形で移住について相談していますか、していませんか、行き先は決まりましたか、決まっていませんかみたいなことを定点的に取っているんですけども、少し傾向として出てきているのは、恐らく1年ほど前はメインが単独行動とフリーランスの方であったり、比較的行動しやすい、もしくは起業されているとか、行動力がもともと比較的高い方が多かったんじゃないかなと思います。今、企業に雇用されている方で、どちらかというとなんか線路か何かがあると進みやすいなと思っていらっしゃる方が多いんじゃないかなと思います。なので、この変化を取るというのは、価値があるのかもしれないというふうに、どのようにアンケートの中に入れるべきかというのはあるんですが、少し行動される人たちの傾向が変わってきたというのはこの調査にも影響が出てくる可能性があるなと感じました。

以上でございます。

【谷口委員】 ありがとうございます。

【小田切座長】 今の中島委員の御主張は非常に重要なんですが、嵩さん、いかがでしょうか。相談現場にいて、最近の変化。

【嵩委員】 ここ5年ほど一般化してきたなと思っています。一般化というとおかしいんですけど、先ほど言われた行動力がある人だけではなくて、本当に普通の人の方が頻繁にうちにはずっと、ここ5年ぐらい来ています。コロナ後どうなのかという、まだうちも運営を再開してから2月たつんですけど、最初の6月1か月はどちらかというところまで移住を考えた方の相談ですね。最近になって、7月ぐらいに入ってきてから、ちょっと変わってきたというのが、これまでどちらかというエリアで決めていたんですね。九州だったら、九州に移住したい。なので、長崎と福岡、相談に来ますみたいだったのが、もうエリアはばらばらで、例えば福岡と福島と徳島とか、よく分からない組合せが増えてきているというのがあって、恐らくいろいろな情報収集の中で、たまたま見つけた地域をキーワードとして

言っているんじゃないかなという、そんな分析をしています。なので、今、一般化はしていません。

【小田切座長】 私もちろん地域に行けないんですが、Z o o mや電話でお話を聞くと、ちょっと違うニュアンスかもしれないんですが、市町村では、コロナ発生直後の移住相談は随分あわてた、焦った相談が多かったようです。安い住宅はないかとか、今すぐ住めるところはないかとか、そういう切迫した相談が比較的多くて、その後は徐々に落ち着いてきているというんですね。調査のタイミングが直接調査は9月ですので、少し落ち着いた雰囲気でのものを把握するようなことはないかもしれませんね。その辺りも意外と重要かもしれない。

谷口先生の問題提起をめぐっていかがでしょうか。

第3番目の要素というのは、いわばPUSHでもPULLでもないので、カテゴリーを明確化すると同時に、ネーミングもしっかりすることになりますね。

【谷口委員】 この委員会で提案されるような形になればいいのかなと思って。

【小田切座長】 そうですね。どうでしょうか。ここはPUSHとPULLとは別に、第3番目に出てくるのか、PUSHのサブ属性として出てくるのかとか、そういう議論、本質的な議論が必要になると思いますが。

【谷口委員】 我々ではコネクトかなとかという話をしている。英語として合っているのかみたいな……。よく分かりません。調査して後で名前をつけていただいても別に構わないので。

【小田切座長】 その点も含めて全般的にいかがでしょうか。指出委員、お願いいたします。

【指出委員】 谷口先生がPUSH及びPULL要因と外的要因と書いていただいたのはとても意義のある項目だと思っています。つながりをサポートする人というのは例えば行政の方なのか、友人なのかみたいなことも含めると、この外的要因の項目はもうちょっと幅があってもいいのかなというふうに思いました。

【谷口委員】 そうですね。PULL側の外的要因をもうちょっと持ってきてもいいかも分からない。

【指出委員】 そう思います。これは要は読者がどこから来たのかみたいなことがとてもメディアでは大事だったりするのと同じなので、実はもしかしたら今回の議論の中でどうやって関係人口が地域にしっかりと接触する方法をつくれるかという意味では、各論では

あるんですけども、これは各論をさらに細かく項目にしてもいいのかもしれないなというふうには思いました。

【田中課長補佐】 それは指出さん、選択肢を拡充するという御理解でいいですかね。

【指出委員】 はい、おっしゃるとおりです。

【小田切座長】 ほかにはいかがでしょうか。

24ページのサンプリングについて、ちょっと田中補佐、御説明をしていただいでよろしいでしょうか。

【田中課長補佐】 三大都市圏は、サンプル数は増やしますが、基本的に昨年度と同様の考え方でサンプルを取りたいと考えています。地方部につきましては、それ以外のその他の地域でございますけれども、サンプルの割りつけは、先ほど小田桐から説明したとおり、ブロック単位で実施したいと考えています。前提として、地方圏では、母集団を確保できるほどモニター数がないということもありまして、ある程度まとめた単位でサンプルの割りつけをしないといけないということがあります。一方で、サンプルの割りつけの範囲として考えられるのは都道府県単位ですが、そこまでやってしまうと、予算との関係で、非常に厳しいところがあって、ある程度まとめてデータを取得する必要があります。どの単位でサンプルの割りつけをするかというところは引き続き議論をしているんですけども、先ほどブロック単位という話をさせていただきましたけれども、ブロックにつきましては生活圏域とか、人口のそれぞれのブロックの統計的妥当性がうまく確保できる範囲で、かつ、なるべく予算が許す限り小さい範囲で設定したいなというふうに思っておりますので、あくまで今書いているブロックの単位というのは、現時点の想定だということですので、実際分析する際には、地域の傾向が分かるような単位で、限界まで小さなブロックを設定したいと考えております。

【小田切座長】 そういうことになるようです。何よりも予算の制約がありますので、都道府県単位にサンプルを案分するのはなかなか難しい。つまりここで書いてあるブロック単位にブロックの年齢構成、あるいは性別構成に合わせてサンプルを取っていくという、そういうことになるということのようです。

この辺り、あるいは質問項目等についていかがでしょうか。よろしいですか。

それでは、随分細かいところもあります。先ほどのPUSH要因、PULLについてのさらに付け加えるという議論もございました。あるいはネーミングの問題もありました。ぜひ事務局から各先生方に問合せをしていただきまして、その上で、これはどのぐらい時間をい

ただけますでしょうか。1週間ぐらいですか。もうちょっと時間をいただけますか。

【田中課長補佐】 お盆の期間を挟みますが、9月中旬から調査しますので、あまり遅くなくなってしまっても検討する時間がなくなることから、2週間後ぐらいを目途に修正した案を事務局から各委員のほうに照会させていただきたいなというふうに思っております。

【小田切座長】 あわせて各省庁にもお願いしてよろしいでしょうか。

【田中課長補佐】 了解いたしました。

【小田切座長】 各省庁にも大変重要な行政的な資料になる可能性がありますので、お願いいたします。

それでは、この部分については問合せでいろいろ御検討いただくということにさせていただいて、今日の議論、全般について皆様方から補足的な意見がありましたら。まずオンラインの多田さん、何か言い忘れてのことなどがありましたらいかがでしょうか。大丈夫ですか。

【多田委員】 そうですね。言い忘れてのこととか、関係人口と地域づくりのところでやる気のあるプレーヤーの人がポイントだというお話をしましたけれども、そういった人をどうやって増やしていくのかとか、見つけてくるのかという、そういった部分については、私、地方に住んでいますので、地方でワークショップをお手伝いしたりとかすることもありますが、意外と何かしたいみたいに考えている方っていらっしゃるんですね。ただ、それが行政の人とかが見つけ切れてないみたいなケースが多いのかなと思っていて、なので、そういう何かしたいと思っている地域の関係案内人予備軍というか、そういった方の活動を推進させてあげられるような何か取組ができるとすげえいいんじゃないかなと思っております。

【小田切座長】 ありがとうございます。

それでは、ほかの委員、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。指出さん、よろしいですか。

【指出委員】 大丈夫です。

【小田切座長】 大丈夫ですか。

それでは、簡単にまとめさせていただきたいと思います。3つの我々の議論のミッションについて一つ一つ議論が明確に出てきたわけではありません。全般的にまとめると、第1に私たちの前提として、関係人口と地域づくりの相互作用を前提としてまず議論していることが明確になった。そうになると、相互作用があるような場というのはどういうものなのかと

いう、そういう議論が出てきたと思います。あわせて、関わりの内容についてどういうふうな関わり内容、関わりしろのあり方も出てきたように思います。それから、関係人口は必ずしもステップアップするものではないんですが、ステップアップの方向性についても議論が出てきたように思います。そういう意味では関係人口と地域づくりの相互作用の在り方をめぐって、いろいろな要素をめぐる議論が今日出てきておりますので、引き続き事務局で整理をお願いしたいと思います。

2番目は、関係人口の受皿をめぐって、鳥取県でかなり積極的な対応があるということをお我々学ぶことができました。その際に出てきた県人会の位置づけですね。これについて、きちんと我々は見識を持つべきだというふうに思います。あるいは、石山委員から出していたような、企業がどのような役割を果たすのかという、ここもしっかりと整理していく必要が重要なんだと思います。これらは、関係人口の受皿論ですが、ここにも大きな課題としてあるのではないかというふうに思っています。

3番目は、どうしても関係人口と地域づくりの相互作用ということをお議論しておりますので、議論は必ず地域づくりとは何なのかという議論に還元されていくんだろうと思います。この部分をしっかりと何度も確認する作業が私たちにとっては必要なんだろうと思います。以前、国土審議会の専門委員会で内発的発展論をお我々議論しました。その議論を常に思い起こしていくような、あるいはそれをバージョンアップしていくような、そういうことも改めて必要なんだということが今日の議論の中でかなり出てきたと思います。その点にかかわり、地域発展のプロセスの議論も中島委員からも出てきました。3番目の議論は常に意識していなければならないというふうに整理させていただきたいと思います。

非常に雑駁ですが、3点についてまとめさせていただきました。

ほかの皆様から何か御質問等々ありますでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、事務局にお返ししたいと思います。

【田中課長補佐】 ありがとうございます。次回が、少し日程が開きまして、10月27日ということとなっております。今日皆さんからたくさん御意見を頂きました。今後の課題に資するような内容の意見も頂いておまして、19ページ目に記載した論点に従って、事務局として整理していきたいと思いますが、次回の懇談会まで時間があるということもございまして、個別に座長及び委員の先生といろいろと御相談というか、意見交換をさせていただければと思うんですけども、皆さん、よろしいでしょうか。ありがとうございます。

本日頂いた意見につきましては事務局のほうで座長と相談の上、まとめさせていただきます。

まして、それに基づきまして場外編ということではないんですけれども、個別にディスカッションさせていただければと思います。

事務局からは以上でございます。

これをもちまして、第2回ライフスタイルの多様化と関係人口に関する懇談会は終了いたします。本日はお忙しいところ、どうもありがとうございました。

— 了 —